

8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

淡路國名所圖繪

卷之四



淡路國洲本町
鍋藤旅館

淡路國名所圖會四之卷目錄

淡路良驛古趾 福良浦 神宮寺 真光寺 竹藤奇生 能登守射切石 潛巖 長礁 鳴門 潤路真人福良磨
屏風岩 鎧崎 春日神社 能登守射切石 潜巖 長礁 鳴門 潤路真人福良磨
古城趾 廣石 阿那賀浦 春日寺 草香圓山 古城趾 廣石 阿那賀浦 春日寺 草香圓山 奥御堂古趾
洲崎 戎祠 朝鮮佛阿彌陀 川藻嶋 朝鮮佛阿彌陀 朝鮮佛阿彌陀
圓山住吉社 重恩寺 慈眼寺 八幡行宮 蛇鰐 行者ケ嶽 屏風礁 藻卧礁 阿那賀溪 伊比島 辨天島
八幡宮 報身寺 煙島 宗像社 鶴嶋古城 干蘭盆大踊 猩猩礁 海瀨礁 鳴門 崇宮の端 澄の嶋 鷦之礁 勝真座禪古趾

畠山ト山終焉の古趾
志知川 暫多郷遺趾
神本八幡宮
行者ヶ原
自駄盧嶋
大和國魂神社
什宝古銅印
阿波井明神社
八幡宮阿吽石
幡多川
岩淵寺
長田八幡宮
長田溪
數川
飯盛ケ隈
感應寺古蹟
犬墳
道祖神祭
莊田八幡宮
船越耶蹟
松月清水
若宮
安住寺
大門古趾
廐之尾
白山權現祠
常滑
千本塔婆祭
城腰耶蹟
平等寺
菅神社
加地故邸
祇園社
納茅址

志知川山	山王權現祠	烏帽子峯	搖石	妙雲寺	西路山	猪狩溪	古城趾	猪狩八幡宮	雩丘
大屋	國清寺旧地	宇佐八幡宮	湊口神社	龍棲山	龍棲山	龍棲山	仲野安雄翁	讚岐岩	大人足趾池
飯山	高天原	寶光寺	八幡浦	龜石	龜石	龜石	新羅谷	雁子崎	新羅谷
明山長壽院古趾	太閤石	鑪河	國清菴	翁媪石	翁媪石	翁媪石	堀部宅地趾	堀部宅地趾	堀部宅地趾
志知古城	堀部宅地趾	寶光寺	智積寺	智積寺	智積寺	智積寺	階出邸趾	階出邸趾	階出邸趾
城の腰	堀部宅地趾	實弘上人墓	定惠島	定惠島	定惠島	定惠島	志知組橋	志知組橋	志知組橋
	堀部宅地趾	難波溪	聲明寺	勝算和尚碑	勝算和尚碑	勝算和尚碑			
	堀部宅地趾	伊勢明神社	常樂寺	家山	家山	家山			
	堀部宅地趾	光明寺	神應寺	常樂寺	常樂寺	常樂寺			
	堀部宅地趾	光明寺	童松	河童松	河童松	河童松			
	堀部宅地趾	光明寺	八幡宮	德永八幡宮	德永八幡宮	德永八幡宮			

福良驛故址

福良の浦の東浮上の南小東駅宿

西駄宿の谷といひて星の下への駅家の趾と云ふ

延喜式曰 淡路國驛馬 由良 大野 福良 各足

又驛馬直法 漢路國上馬三百乘中馬二百乘

由良の湊より内田牛草物部守原木を経て大野川より行
内行寺地頭方国衙八幡を経て福良又より行程四里蓋し

又明石の海と渡る時、石屋より来馬志筑平安廣田小のそり夫ト
至り可哀想也。度々雨風の時、波立つて、無聲の巷。

當國の南の隅より港中廣く諸船を泊ス小便ス次第に書シテ云支邑シキヨ中山シマツ等上船前葉抵取シテ

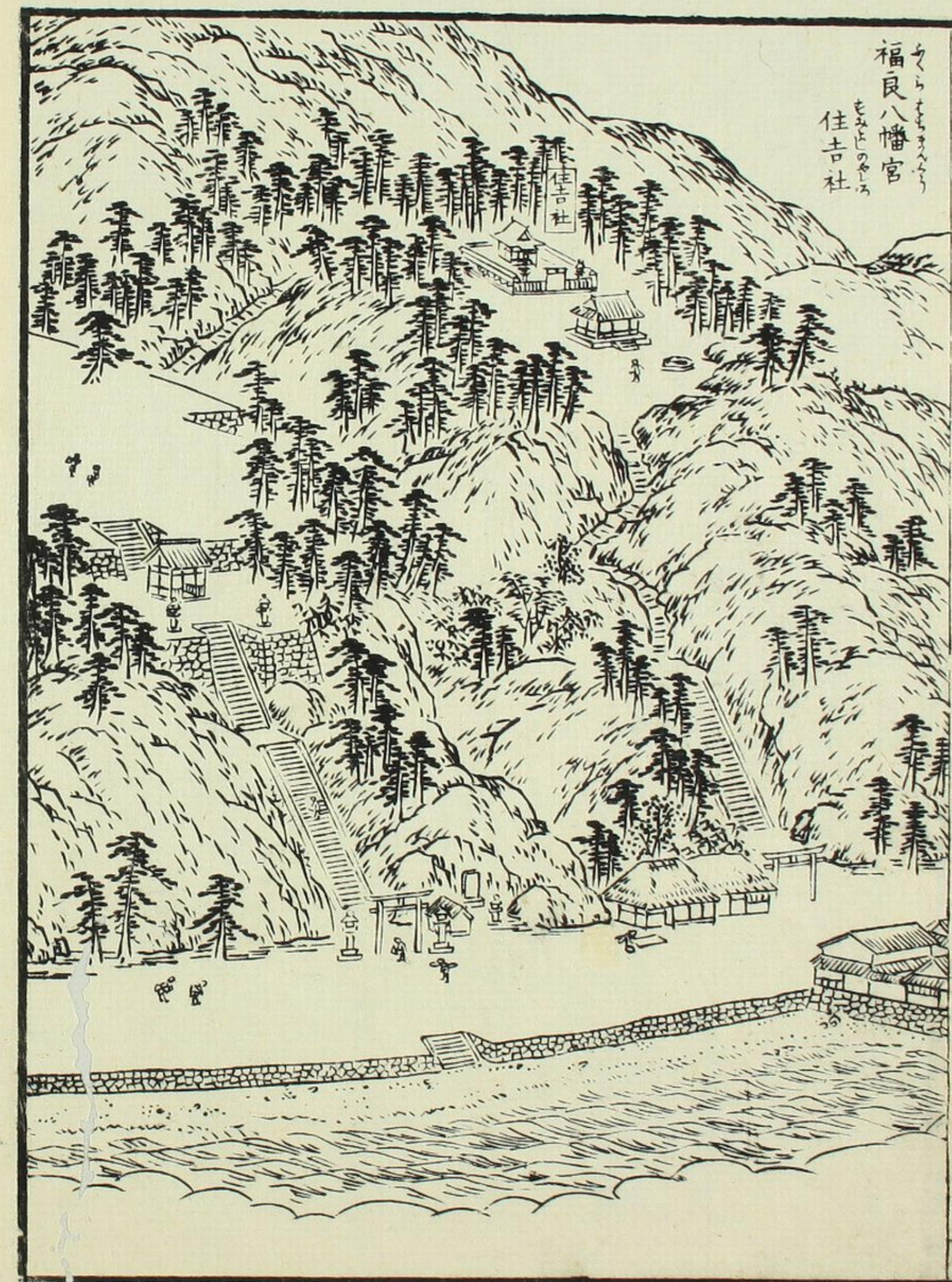
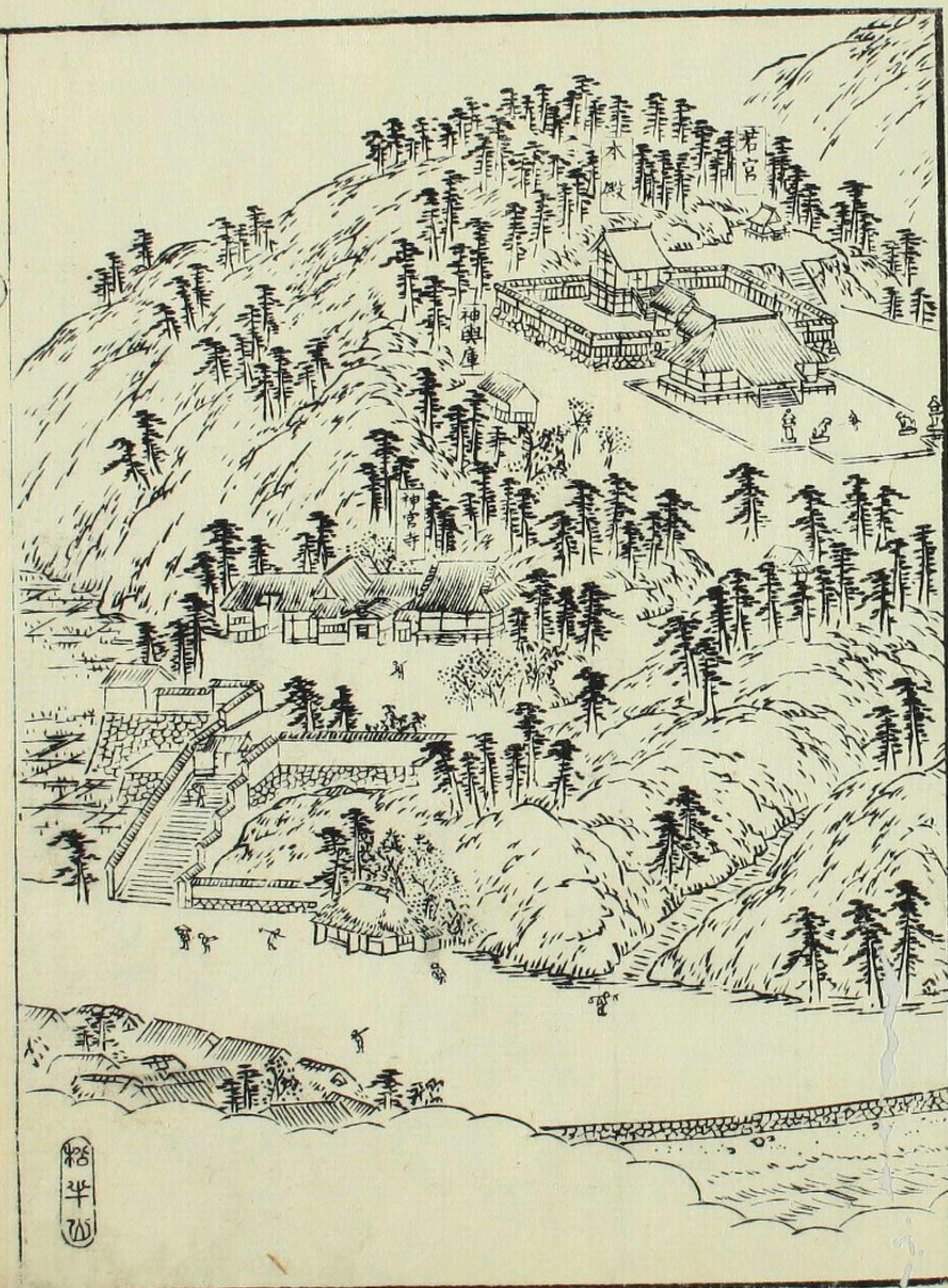
此後の前代の山岳本業は、此後もああ系のもうひやる。

今車絕間亦一多程小渡口今以船宿旅宿軒

裙帶葉の他又類ひあら風味あり又干淨の鹽竈りと煙と立澳の輪引船の
漁火と燒火ど民用の助けにて浦の風景を添ひあり凡市坊家数七百餘
戸良より坤よ續き長三十町余乾より巽へ幅二町ぞり家居相續る市坊
大抵三條山をふりと上町となり海濱をあると下町となり
一書云柳當浦の港へ東西一里の入海より向方十余町をもて山なり
峯並びに嶮しく松樹綠や四季の詠め絶ぜ山の尾寺谷小かくを
残近き小家居そろひり朝の烟立のおり日が映ぢるに勇士キノ雲
より小晴行ば小舟を出で來り小網引あり釣たまゝ或へ國々へ
通る船入り出あり家々の印立て行違ふ舟のひなれば水鳥群
來る浪間不浮沉ゆる眺めあり岸又望る左又丸山八幡山右の方又煙島
森のてく少く南小湖寄嶋蛇の巣鳴ハ阿万山より煙島の後又鶴島
の古城跡菊藻島行者獄戸哥の鼻ハ鳴門のぞ怒鳴る涛の光景へ言の
葉すれ尽し遙望雪の如く白砂小墨流せりと松の生茂り
月燈のがと漁火もあくみまく金波滄々と山でうらはれ世外
の思ひとあせり云

阿列むやの川にあり山く城地の辺りまく委く見つゝりよまで小夕陽山
照らせば黄葉もく紅カアリ暮て一家の燈一幽小寂莫くこれと催
せう沖より漁火の波よ漂ふ中細引の聲聞ゆれば程か櫓びり一響
か一来る魚取の帰りゆく濱の松明炎くと市もく声かまびき
月燈のがと漁火もあくみまく金波滄々と山でうらはれ世外
の思ひとあせり云

圓山住吉神社 福良浦市坊の東より社頭の山上より内海を眺望する島々の光景絶勝なり例祭六月廿日
神宮寺 本乎阿弥陀佛八幡宮別當として住吉の社勢と兼帶
八幡宮 右圓山より山上より境内廣く宮造美なり例祭十一月十五日神龜渡御なり當浦の生七神と云
水神 同浦の東海濱より丹生明神の社なりと云今尚水神と地名せり丹生明神則ち水神ある故也
福聚山慈眼寺 同市坊の中より山の方あり真言宗龍華院と号ひ
寺記云當山ハ觀自在薩埵靈應の地あり鳴門の海中より出現一給入
尊像あり其由来と尋ねて往昔當浦は宥智沙弥と号する奇異の道人



り恒不塵芥と厭ひ専ら菩提と求め佛衆と尋ひて修練し遠近の
里と巡つて托鉢一鹿餌と饗き生涯と資財終ふ草廬を結んと
勤行あらうたゞ此小一年の夕海中より高僧未つて無比の尊體をあふと
夢見る事あり翌朝宥智沙弥の徒と語く曰前夜奇異の靈夢と蒙ひ
かあらば今日佛陀の尊像と得べと言ひも終らざれに感後湯を浴す十面
の尊容鳴門の澳より漂漾して奇うる哉大士龍宮城より涌出する
者と沙弥合掌して禮拜し実小夢中の佛勅割符と合ひが如くありと
数回感嘆せり余後此尊像と當寺かひり以来寺号と龍海寺と
称す斯星霜より移り仁治四年の仲春高野山の古哲道範阿闍梨本末
の議論小依て讚列小配流の時當國繪島の磯不着岸し稍く此津より
小不因暴風怒號して濁浪空と淒ぐ是故小當山の觀音を詣て天氣の晴
和の祈念りゆれ忽ち其靈驗あり翌日阿列の姫田不ぬりあゝ時人以ましく
佛力の深妙と感ぞ然るに阿列姫田の庄不瘡痘と病く其貌醜き者あり其
此地より嘗て予小語て曰汝列福良の龍海寺あり觀音へ奇瑞殊妙の
產壇みゆく定業と能轉ざるの尊体ありとされば彼の津を渡りて祈念せば
平復きゆれ速りあらんと病者ハ其教と隨ひ日ひよ當浦不渡り來つて
觀音の宝前小三七夜參籠して大慈大悲と念むる程其滿むる夜
夢中小白髮の老翁来つて忽ち杖と以て其頂と打と見て覺つて
則ち病ひ平愈して回復して奇異あり且厄難厄災と除くらと勝
計えりよ又寛永十四年春嵯峨宮二畠尊性親王阿列不下向して鳴戸
御遊覽の時住僧宥弘御宮不謁て當寺の監觴を告奉るより末寺号の令
旨を賜る此時改々福聚山慈眼寺と号ひ是慈眼視衆生福聚海無量
の金言不因もろ也云云

報身寺

同所下向淨土宗智光山遍照院と号ひ本名阿弥陀佛鎮守普神金毘羅也とある

真光寺

同所下向一向宗西流湖長山と号ひ本名阿弥陀佛元文中火災て古記未灰烬もとより

重恩寺

同浦の西の山の方下向例年八幡の神龕此所より渡御あり小社あり俗名牛王殿と云ふ

八幡行宮

式部社と云ふ

里老云阿万城主郷の備前と云人あり細川の氏族にて阿万郷より居住

故ふ郷氏と称し嘗て沼島の住人梶原氏と襲ひ伐んとせりが謀浅く

かくて梶原より逆寄り阿万城と攻めしづば郷方兵をけて敗軍及び

終小大將郷備前ハ唯一個城と抜出て阿萬河内の僧房を隠匿時より寺僧了海

曰此所ハ敵地より近づき蟻もすよ便よりば福良の浦より遁を行ひ易く

探り得まじと郷寔もと詰つて福良の浦より潜びる然より梶原探索ると急

あく程より福良の浦人後難と恐き告うる是より郷ハ遁るに道あり終に

自裁を先より臨て浦人の不実ありと怨み怒りて没し其年大より疫癪流行

りえりえ程よりは因て思ふ牛王殿と郷殿と音訓相近きとして混同の誤りあり

里民死むるより是正して郷殿の崇りたると里俗云れど祠と嘗て其靈と祭り

仲野安雄翁按云此傳説誠より事實あらず一故事小備にて然れども傳説の

如くあれバ憂死する窮將の灵と祀る祠前より八幡太神の鳳輿と駐め奉る

べきに由れば因て思ふ牛王殿と郷殿と音訓相近きとして混同の誤りあり

されば郷殿の自殺の趾は別より牛王殿の地と云ふ

一說より牛王殿へより牛王寶印の神符と製して施させ亭舎の趾ありと云

或云牛王殿の社の傍より古墳爰より其中小天文年中及び天正九年四月七日の文字

見へう天正九年へ郷氏の石碑ある今も四月七日と以て象もあと心得

又阿万ゆくは此窮將と郷丹後守重朝と言傳ふと云ふ

一說小元暦元年春二月攝羽一の谷の合戦より熊谷治郎直寅平家の公達無官太夫

煙鳴同浦の側背の西にあり小島あり綠樹蔽翳して島の上に宗像の社あり俗名辨財天の社と云ふ

嶋の頂き平地凡五間下向宗像社あり此南より石小祠あり里人云れど無官太夫敦盛の古墳ありと言傳ふ

福良浦
うらのうら

渡海場
うみば

久高や
くたかや

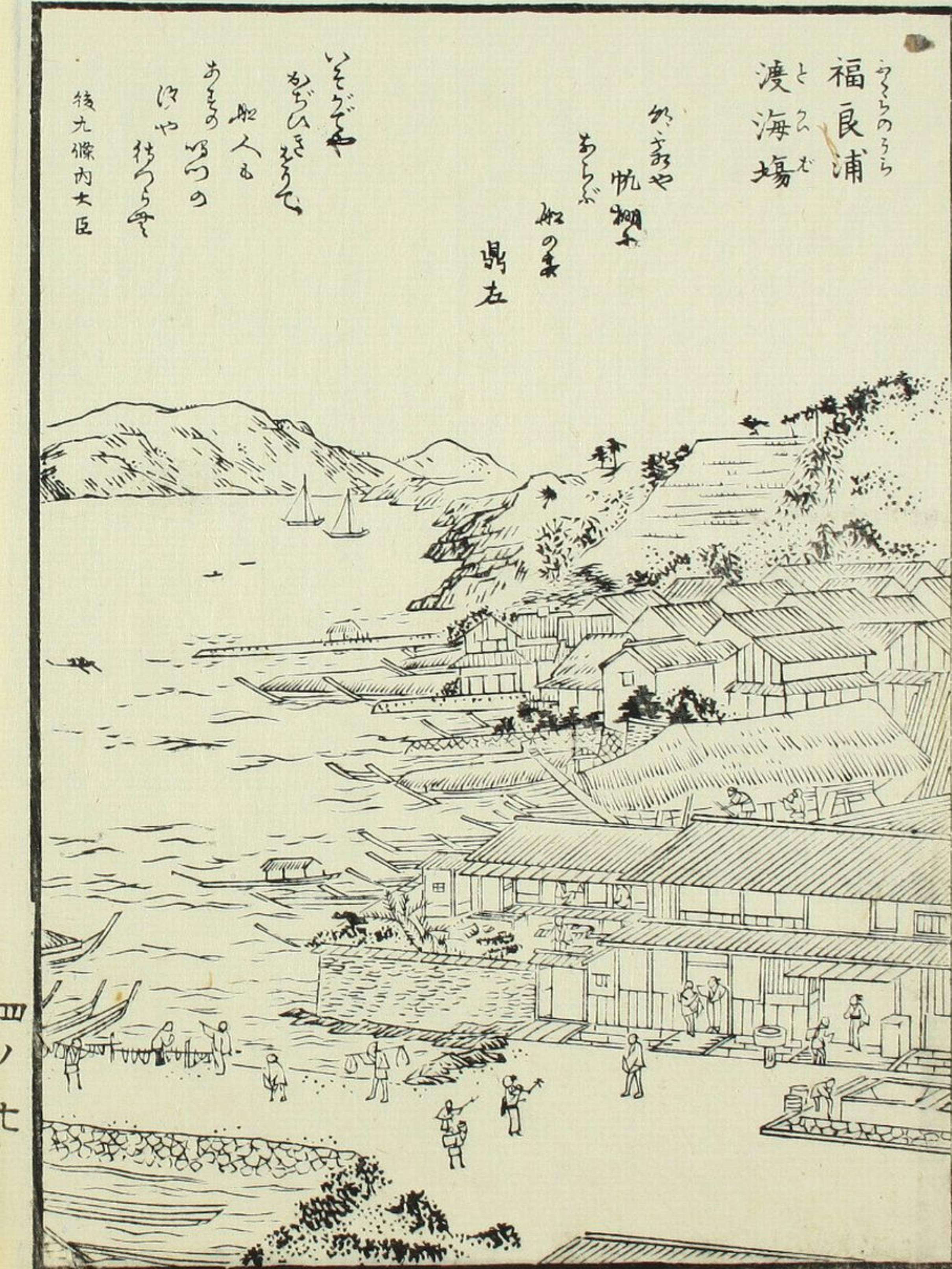
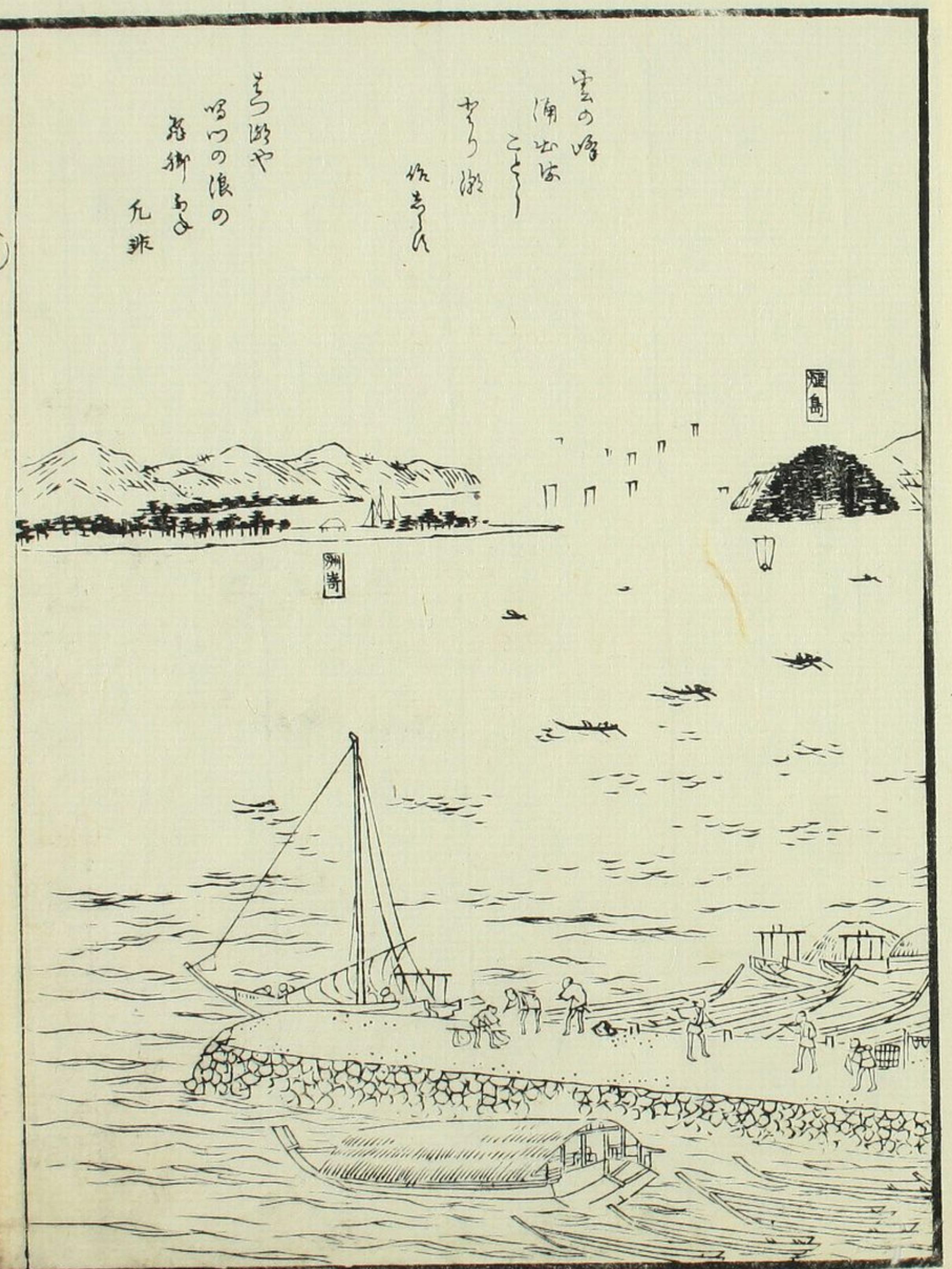
帆船
はんせん

島左
しまさ

もぢのまき
舟人
ふねひと
あまのまき
波
なみ
けや
けづらき

後九條内大臣
ごじゅうじょううちだいじん

四ノ七



敦盛と擊とう其遺體と父經盛の陣と送る其時此島と於て茶毘と煙とあり是
よりとて煙島と号く今後菩提所を営み摩尼山紅蓮寺と号く則摩尼

島の宝珠

とがとうと紅蓮ハ敦盛の法号ありといふ

又云紅蓮寺後世廢し本尊觀世音の尊身へ今神宮寺小安寺是と云

按少洛陽新黒谷紫雲山光明寺小敦盛の碑あり石面小書

空顏璘莊とひり紅蓮の法号ありと云ふ後人尚考ふべ

雨一ふく若葉青葉やまつ島

蝶夢

竹藤

右煙島の林中より繁茂して大樹よりも其花葉とも小尋常の紫藤より異なりけり
太き幹より細き枝より生て其勝景愛まし

洲寄

同煙島の東の海中より乾燥する異なりて長さ三町余艮より坤よりするを一町なり
地上より白砂より松樹苔々と列り生て其勝景愛まし

里老傳へ云此洲寄より阿万の下角俗に蛇の

里老傳へ云此洲寄より阿万の下角俗に蛇の
とひふ所へ續きく小松並び立

うらへとひふ然もバ天の橋立の景色よ彷彿うる勝地と有えうるねばらそ

平家の公達の爰よ船とひりて詠ぐあひと云古くも話よのむ

ゆれがふ君よ見せや津路あり福良の洲寄浪の松わ
一説ふ天正年间地震の為ふ蛇鰐と洲寄の間かれく海よ落入とくとり

蛭兒祠

同所

蛇鰐

次上に隸

鶴嶋古城

或絃島と作る烟島の西より海面一町許を隔つ鶴の地方より南へ出る岩山の古塗の頂

一説ふ天正年间地震の為ふ蛇鰐と洲寄の間かれく海よ落入とくとり

鶴嶋古城

平丘六所高き所東西九十八間南北七間同東の丸東西三十一間南北七間同東丸東西五間南北

同東の端の丸東西南北二間半又本丸の西は二段あり各五間三間程本丸の直立二十三間東の端を十間

東西長四町余南北の幅二町余西南各懸岸へ

當城ハ源平争戦の時六條判官為義十男加茂冠者義次同十二男治路冠者

義久志を義經と通じ籠城に壽永二年能登守教經兵船十余艘と從へ攻とく

義次敗軍して討死し義久は泉列吹井ふ逐遂よ教經の為よ討れ義久の子若狭

義邦建久二年福良と販と住を子孫福良氏と改む嘉吉の頃福良石見

融通りう長禄の頃藏人大夫政貴あり文正の頃勘解由左衛門政幸あり

同時よ相模守義基の時城と去り細川成之と属し阿羽撫養と住ひ子

孫阿別とありといふ

平家物語云平家一の谷へ渡り後ハ四國の者ども一向隨ひ奉らば中を阿波

讃岐の在廳等皆平家と背く源氏ふ心と通ひて今が流石昨日今日まで
平家を隨ひ奉る自身の今日始て源氏へ至りともとも用ひ給ひ
平家は矢一射け奉る夫を表かてあらんと門脇中納言教盛越前
三位通盛能登守教經父子三人備前國下津井は在もと聞く兵船十餘
艘ある寄り能登守大怒て昨日まで我等が馬の草薙と奴原が
何より契と變じるみぞ有んある其義久が一個も洩さば討やどと小舟とも
押浮べ追もれべ四國の者ども人目ぢりふ矢一射除んとめと思ひ
しに能登殿よ餘りふ手痛く攻らと奉て叶ふとぞ思ひん遠負ひ引
退き淡路國福良の泊よ着ふたり其國よ源氏二人びと廻り故六條判官
為義が末子加茂冠者義嗣淡路冠者義久と聞へと大將よ頼く城廓と
構す待とあらふ能登殿押寄く散々お責めバ加茂冠者討死淡路冠者
ハ痛手を負く虜ふとせられを残り留て防矢射る者も一百世餘人が
首斬りせ討手の交名記す福原へとまをあくせらむれ云云

常盤草按云系圖より義久と義季とあり又曰鶴島の墨址その履歴詳たゞ
思ふ不足利争乱の世に福良氏の人かど居住せりあつて福良又住す嘉吉中
福良石見り長禄中又福良藏人太夫政貴文正年間より福良勘解由左工門

政幸あり又福良安藝守かどり委き事ハ不知云

能登守射切石 右古城の海岸小あり傳云鶴島の城と能登守教經責られ時弓勢の程と敵と見せんと
此石と射切らしく磯邊に立つる大石半折らか

高四間許切口の尖岩ハ凡十間ちう隔て山手の方の岩より六尺切石凡五尺長さ八尺許

壁立故城臨海高 重陽登得倒樽醪 讚阿山色天晴朗
洲嶋松聲秋怒號 樹裏千兵猶亂雁 洋中萬馬認李濤
恨他戰畧輸平將 埋沒當年幾箭刀

睦齋

朝鮮佛阿弥陀 同浦平賴其の家を藏ひ立像長凡三尺 許傳云遠祖平賴右門あら者朝鮮の陣供奉
焼亡の時西風烈しくて其家危ふう一一所北風吹く此家無難と除れり是全くあの
灵佛の奇瑞あるんと言傳ふ又古代の織あらう一佛具の打敷及ひ雪の下と号す中刀二腰
と珍藏れ

九日 登鶴嶋故城

同浦岡田氏所藏

国君元和元年大坂

御在陣の時賜り

所の尊句之写

え日

另紙

至鎮朝臣ハ國君ニ
宗樹ハ阿府の士牛田氏の
遠祖ニ

東雲ハ岡田氏の遠祖ニ

又

忠英公より賜る描金の提重

一組紙扇珍藏を

尚此余古書許多と藏於事
繁それ畧之

手あくやめでかくまつ 四 海
うすもあくまくまくまく
えり
至清教院

山もけきかきみや 宗西の海

あいの糸糸とくまくまく

疊るもゆくくらむくら

くまくらてんあくまく

寫物

四ノ十

通丸光

東雲

俳師化雷之跡

同浦は雷の字後より改び土師氏譲大彰府下火器隊某の養子とあり多川
与助と林へ後漢仕し故郷は飯石十一屋辰五とも俳諧どものとて京師及び浪花ふ
寓居故都浪漫と号次享保中駿河の白隱和尚遠州見付の駅見性寺にて物讀より時藏の
巖を所と過り相見し手折り床よ蓮の花と投げ置ぬと挨拶一向を吟くれば和尚服ひそ年を
越す津の國ある次第三と附介後國々の好士へりとおり七十二候は六句筆と加へて満尾とくろと津列ふ
して花雷の匂ひ其匂云

眼中の童子ハ牛の角よ手と草々

扁葉の野飼は青草とあすと

乗るふ樂ふ見へても蓮の上

嵐々

三界無安猶鴟牛

駿河白隱

ううれ女の彦抱く也よ生伸く

櫻津淡々

掉る竹籠も水の曲よ形

淡路花雷

掛け土瓶よ市よ使よ待

阿波来雪

六十六ヶ国の内日向大隅のみちを

大和土佐と二人を加ふ



百八十一



花雷寛政三年五月廿五日享年八十有二歿

法諱 都浪淡花未斧鍊居士

詳世云

富士サ方塙一度ふ清つちもくぎれ

又ウ

婆婆モー地獄の釜で尻ひぶ湯

此ヲ有て後尚生更一ものと云

千蘭盆會大踊 同浦大がるもの残り一町ぢうもあれ海中すら小島なり俗ニ沖の川藻といへ或ハ大園ともツ松樹生
吳あう世ニ福良まくまく其事蹟未詳あはゞとづ國史ニ見へうと以て
淡路真人福良麻呂 同浦とう出でよしん乎其事蹟未詳あはゞとづ國史ニ見へうと以て

日本後紀云皇統彌照天皇 楢武 延暦十八年六月己丑從五位下

淡路真人福良麻呂為少輔 同大同元年三月壬午從五位

上淡路真人福良麻呂云云為山作司云

刈藻嶋

同浦大がるもの残り一町ぢうもあれ海中すら小島なり俗ニ沖の川藻といへ或ハ大園ともツ松樹生
吳あう世ニ福良まくまく其事蹟未詳あはゞとづ國史ニ見へうと以て
奇石怪岩モ一則鷺島の古城の西町許

此嶋の周凡七町高さ八間ぢうり南北へ長く東西短く古老のゆく當嶋の

古名と王園とツメテ壽永の頃平家の一門一の村落城の時公卿軍船など

四ノ十二

安德天皇と守護モテ御船掛島ニ泊モあそびく島上よりて宸處と
慰め奉りテよし玉園と称モロトゾ或ハ云うの嶋と古くい遠の島

と称は是正一自凝島の畧語ナクベー公望私記モおのころ嶋

と自ら凝る義ナク今淡路島の西南の角ニ見在モリ小嶋ナク
俗尚其名と存セリモリスハ符合セリ今大園とヘモ皆轉語

アラムとは又一理ナク相似ナク然モジモ自凝島の説ナシ

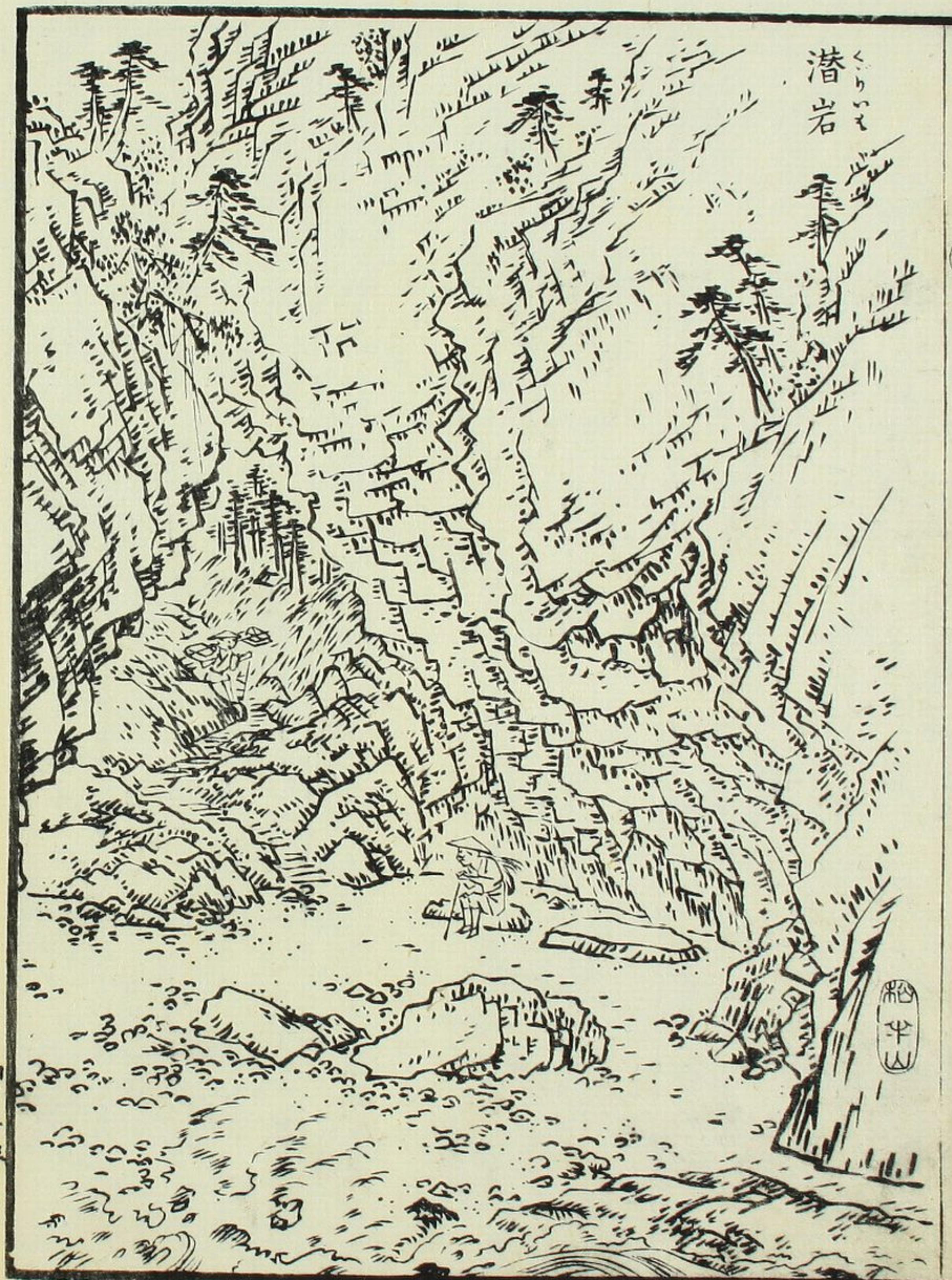
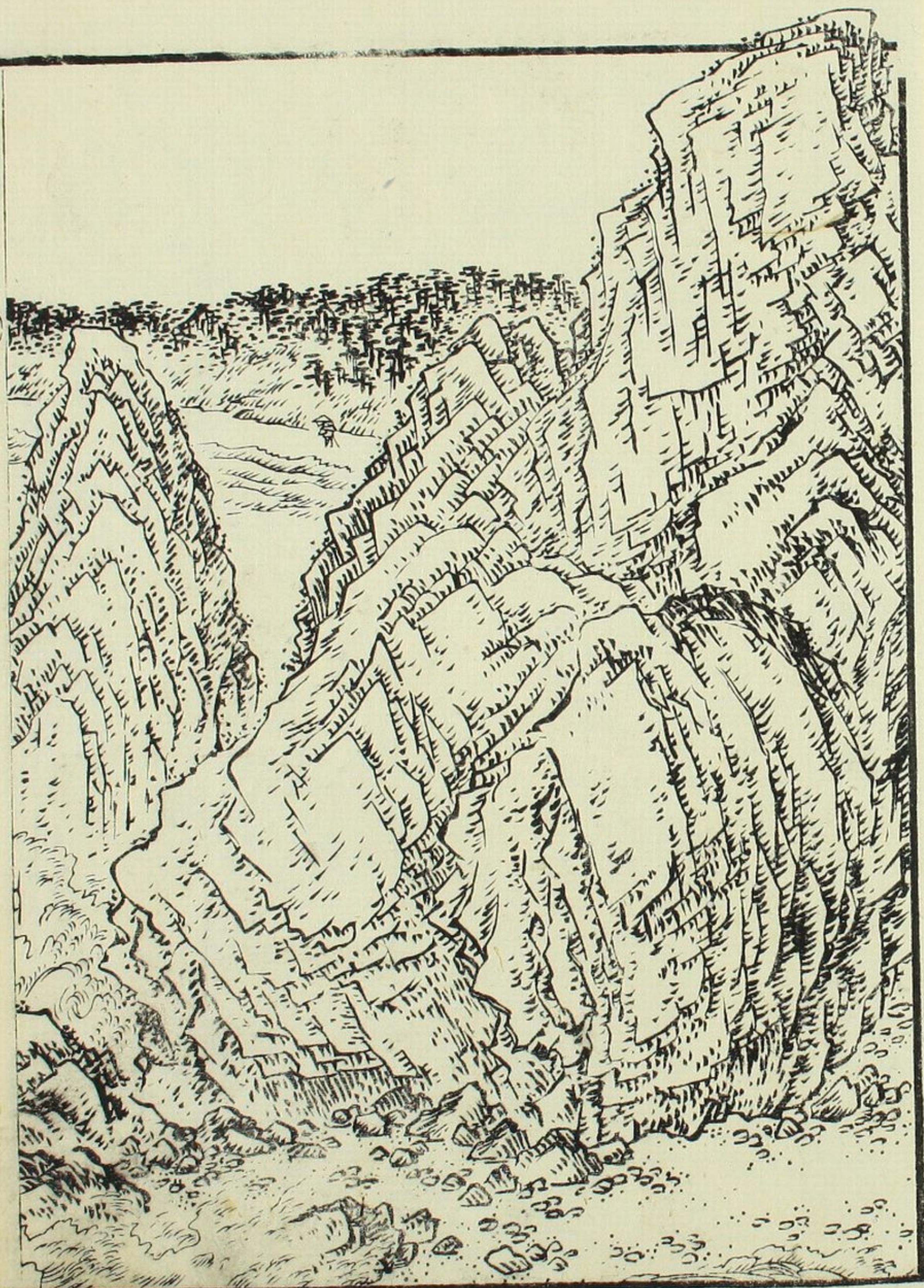
トトロミシテ実事詳アリ後人尚考スベ

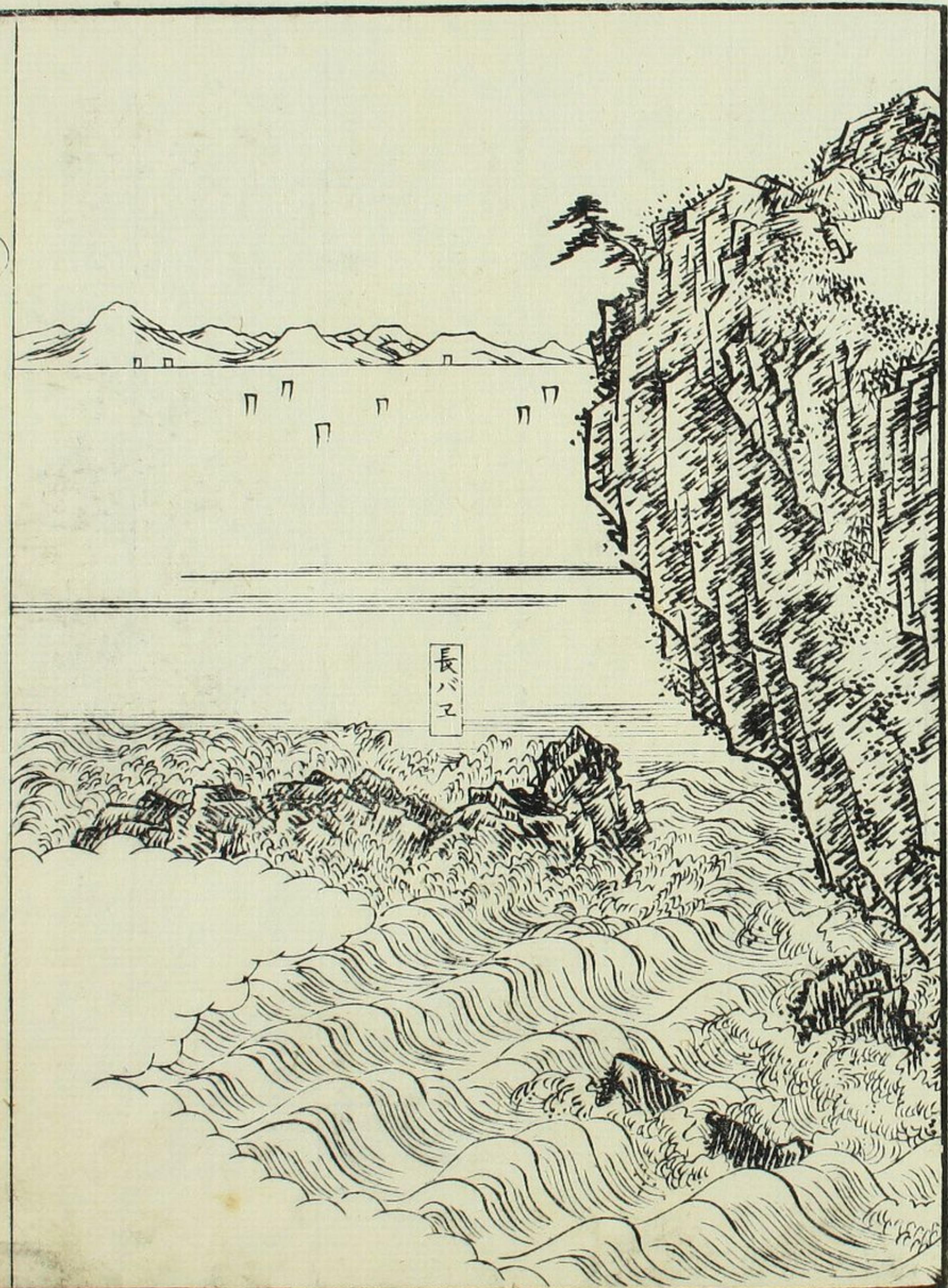
尾風礁 同島の岸ナリ猩々礁 同沖の方ナリ

潛岩 大井涼の谷口より岸の下を磁取不道入海近大磐石不穴あり東より西へ通徹モ
所謂石門ナリ洞中の廣さ三間四方ナリ高さ凡一丈余穴道ナリて人馬

往返モリ難い行はれ行人は石中ニ暑トモ寒風を凌ぐ便りテ実出海近の一奇ナリ

鳥帽子岩 久岩の南の壁ニ高さ四間ぢう其形をり名く
行者嶽 同砥取村の南ニ出張る峻崖ナリ高サセ間許絕頂室形造りの小堂ナリ役行者を安ヒ例年
六月七日系宿群集於南の岸の上ニ石の不動尊あり





此嶺より鳴門と眺望せば眼前かくし白浪岩と碎く光景美觀あり
相傳て曰往古役の小角鬼神と駆使して其山岳より鳴門の海の逆まく
浪險へ舟人の難うと憐み阿波の間と陸路とせんとて祈られたり小数珠
を貫る緒の達磨の間より断り乱れ落されば其功成なり止ぬ是千載の
遺恨ありとど

海獺礁 行者がさけとう東の 長礁 行者がさけの南の海涯うち行
方の海際

里老云行者が嶺と潮寄の端と吹上の小濱の鼻と俱も合つて行者が嶺へ
矣の方から小濱及び潮寄ハ距更三十町許小濱より潮寄へも又卅町餘之
廣石 延度三十町びう高十四間ト云

藻臥礁 鳴門寄三三高サ一間半びう西へ出でりる岩ぞ

鳴門崎 行者が嶺より西の方へ突出する事凡十町余馬の脊のてゝ厚き一町より過ば福良阿那等
の間所謂當國の端あり或ハ魂寄ともいふ
此地ハ淡路國の端にて阿波國板野郡撫娘孫崎の鼻不對ふ其中间

所謂鳴戸かくも向すア波の飛島裸嶋ともいは細千島大毛の孫崎

里の蟹の磯寄ホ眼前より南を望めバ椿泊の湯嶋紀伊國の日の御寄
北より讚岐路小豆島等見えて風景殊よ絶勝あり

鳴門

阿波の国界ひづれ彼方ハ阿波國板野郡撫娘の浦ニ属一は方ハ淡路國鳴門寄

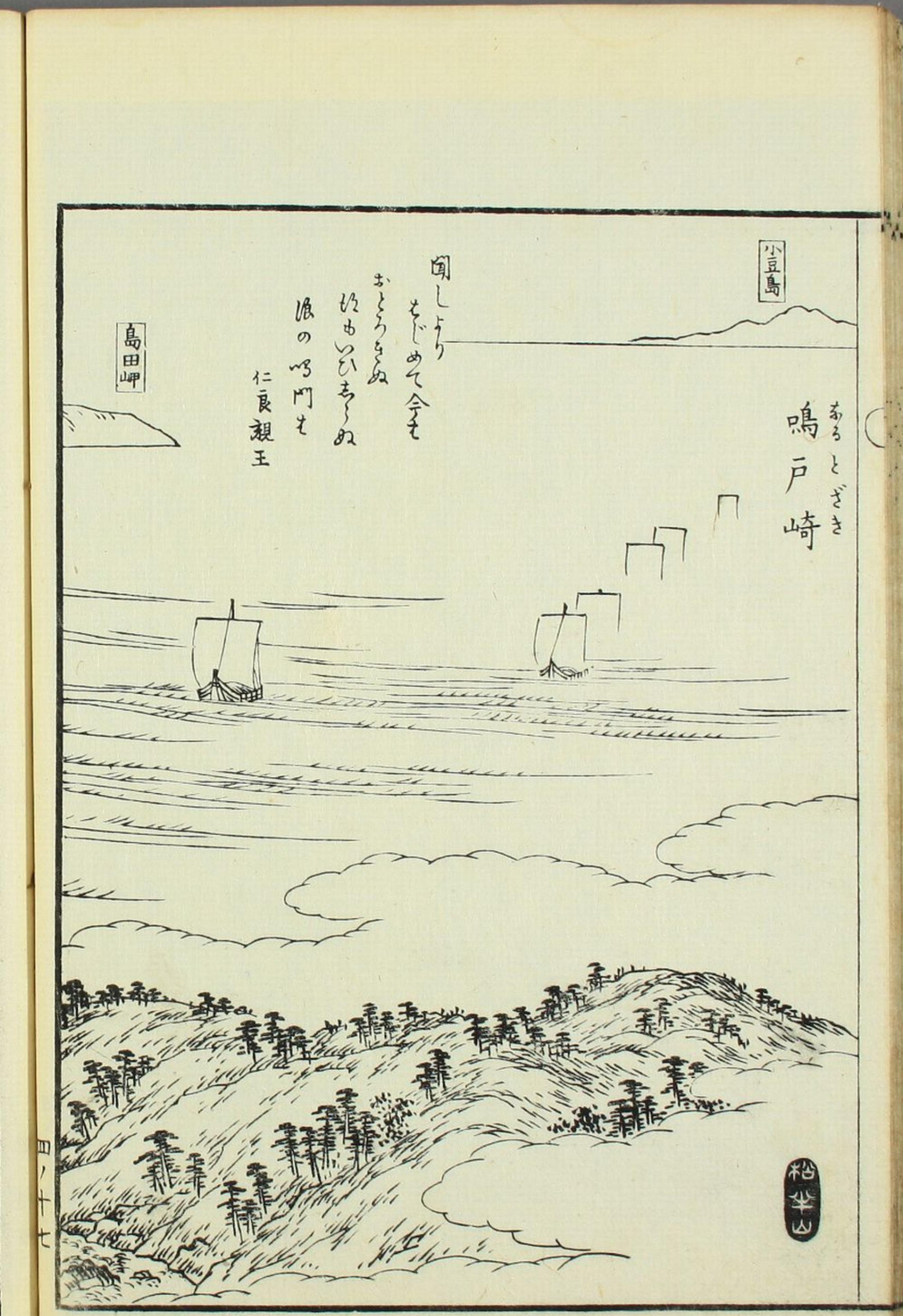
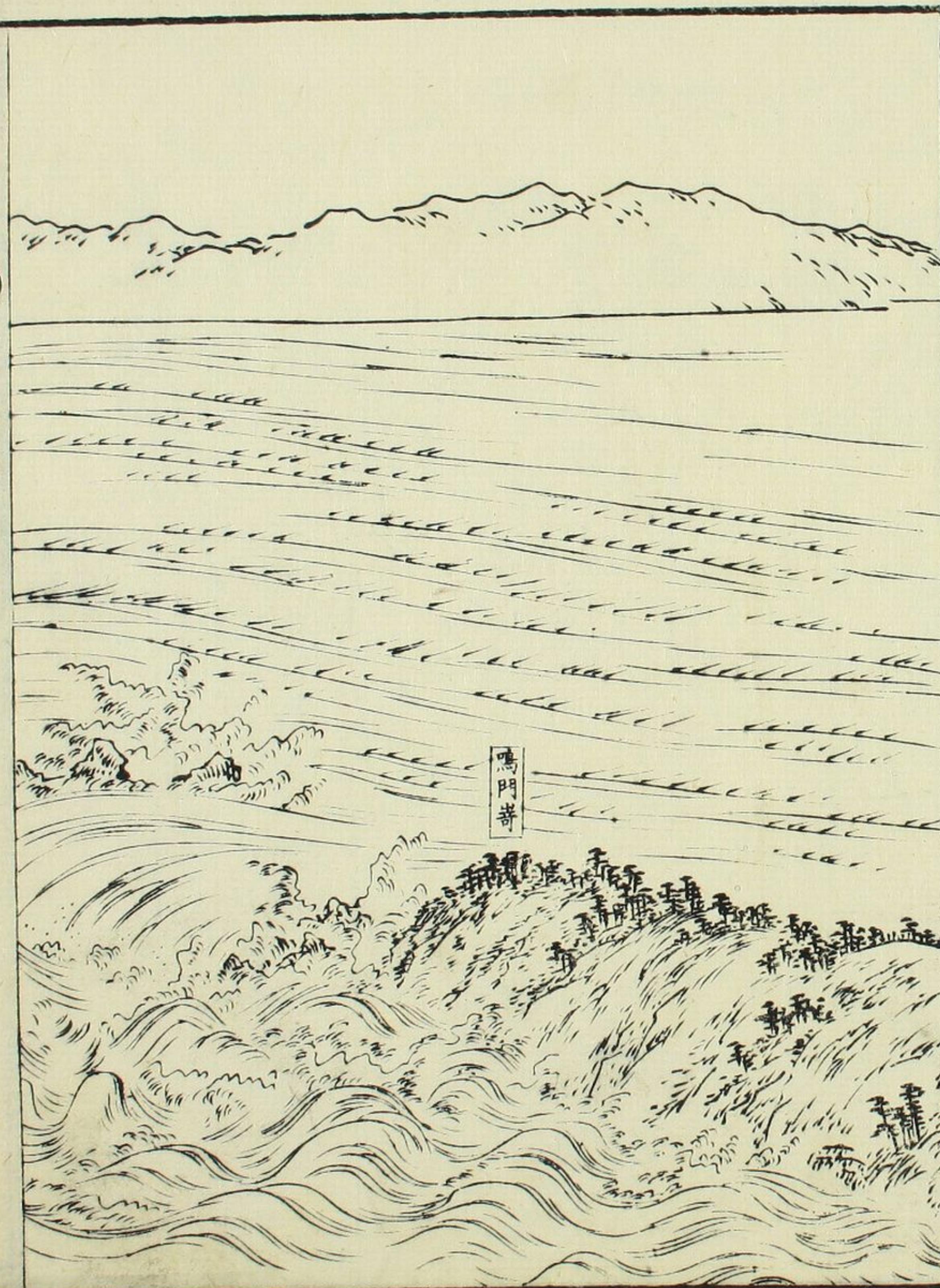
抑此鳴戸と云ハ阿波兩國の界有リ其間十有餘町中間小巖石峙ち
テ是と中瀬と号ひ長百三十間横半間 鳴戸寄より此中瀬まぐ凡百
三十間をうちこれと小鳴戸と号く深さ七尋より過ば其左右一町程よりれ
八十尋或ハ九十尋の深さをも中瀬より孫寄の鼻まぐ凡五百間許
此間を大鳴戸とり深さ四尋より過ば是より南飛島の邊よりれ深さ
百尋北の方みく八尋余及び満潮より北より行く孫寄の乾小大
渦ひづれ干潮より南取て飛島の南北の大渦生ひ又次もぢ小渦ひづれ舉て
枝ふべくば都より潮の盈虛よりれ此迫門よせまう故よ水勢激しく磐石
の轉ひづれ原未海上小高下ゆるも甚しき故干潮の時よりれ
高き方より落る水龍の如く潮満る時よりれ起り立怒涛雪の

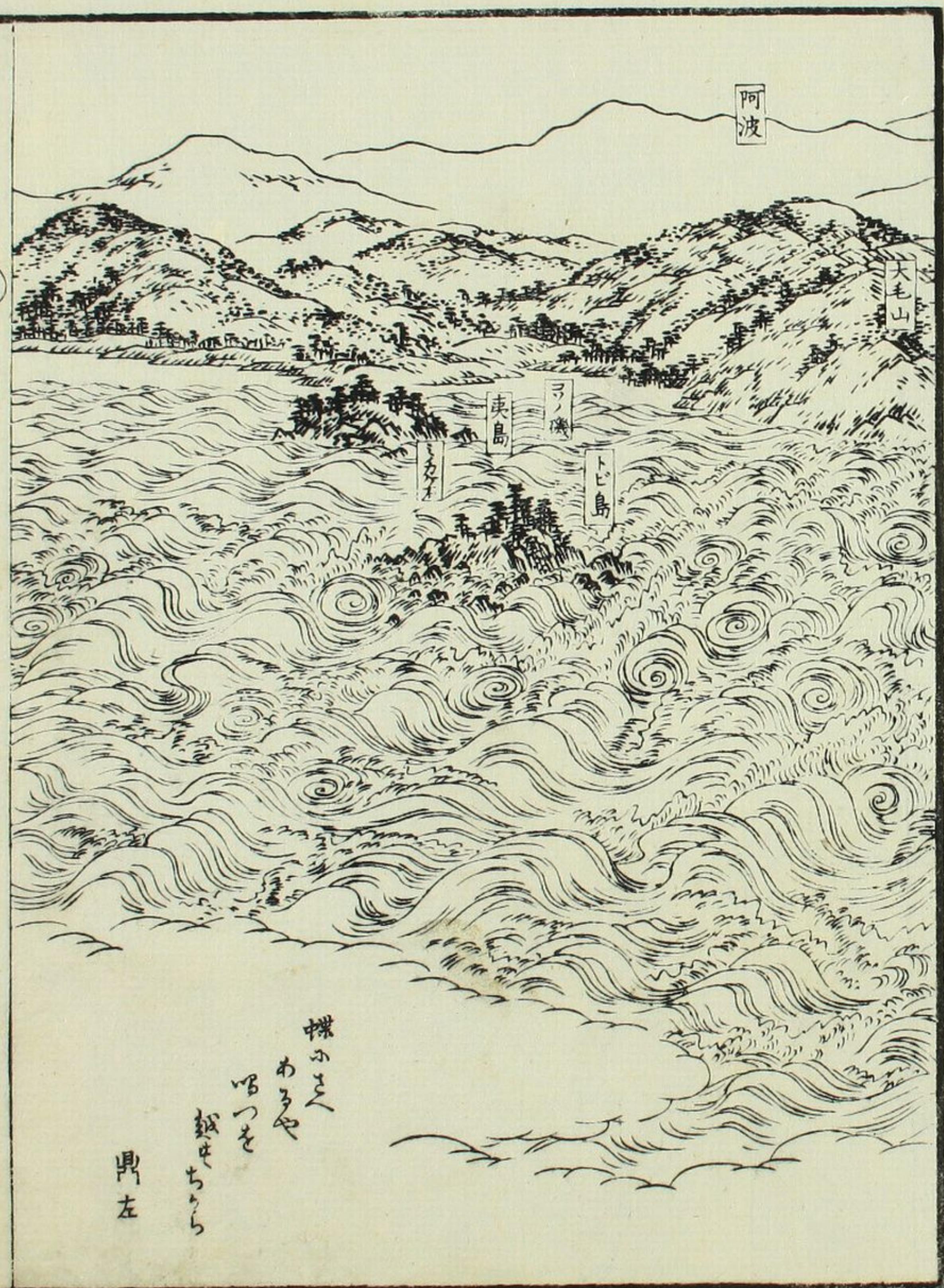
積もる山岳より落とし船涸震動して汐の勢ひ大河の早瀬
か彷彿う斯常に鳴ひくが故ふ鳴門と号する平を潮謐よ海平うあら
ざれば舟舶うそ渡るに難一又順水より潮和ある時ハ海士も小舟残
よせし釣され貝と株藻と薺も数う磯曲は嶺岩奇石疊列して
風景最奇絕う尋常の盈虚に拘る光景殊更晚春の三日の沙干
み其凌競うと言語よ絶り実扶桑第一の迫門とりよ
按よ迫門ハ海の左右より山なり其間狭く夾む故よ水迫り波涛多く
底と穿ち水最深く淵の如くあるが故よ盤渦と常ありされば鳴門ハ
就中迫門の甚しきりのみ其上海原よ高低なりて波涛高き的り
低き小島うふよう斯の如き形勢をあり所謂海内無双の難所なり

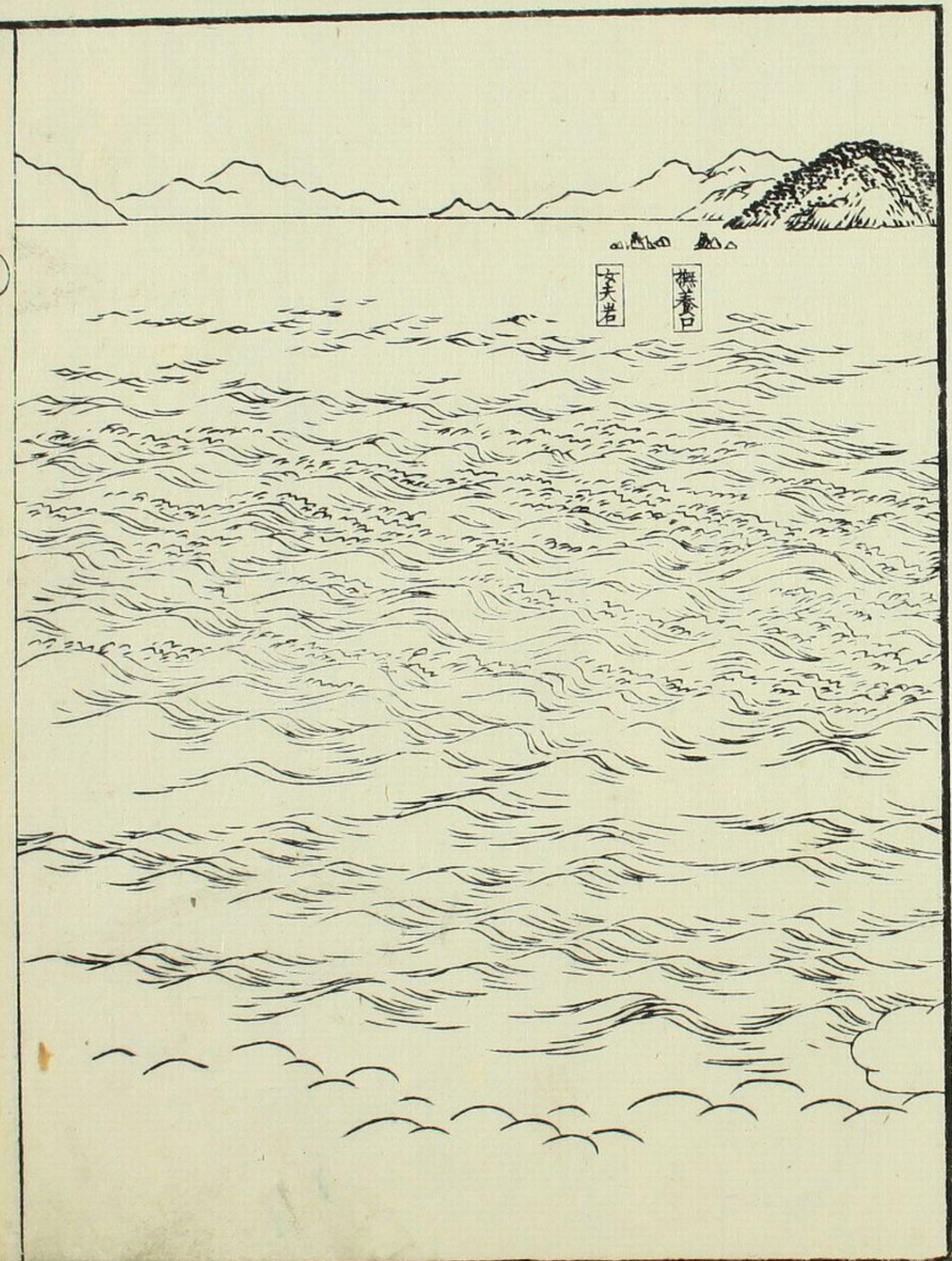
鳴門記

名ノゆ阿波の鳴門も南海の一名速吸名門とうや扶桑第一の浦門
風景より油へ東南よ流り百里よ餘う其潮筋の

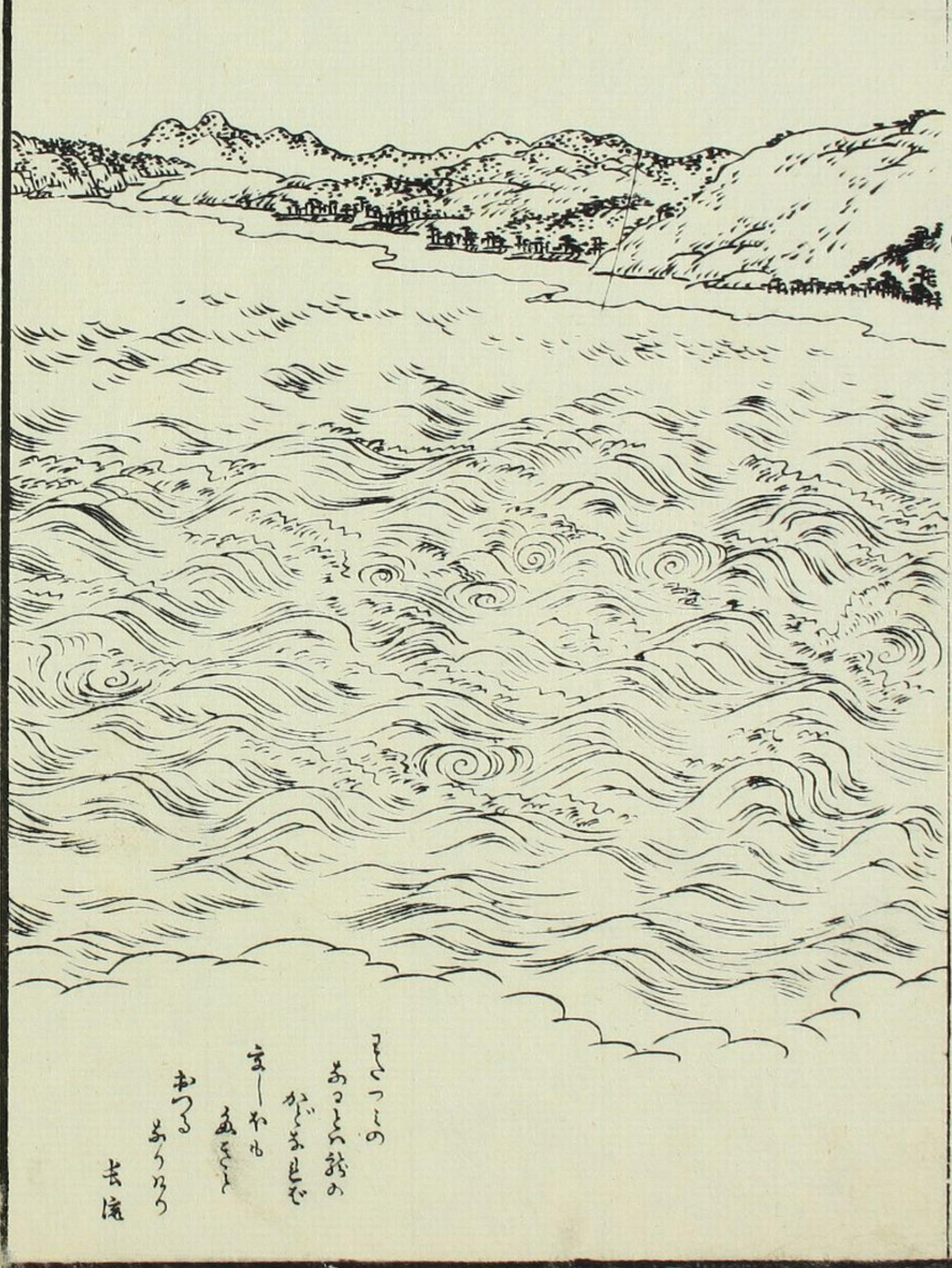
よびれあと五十三筋よ別もく迎き沼島にて紀遠きハ紀の海不
津うかゝ潮の早きよ鯨の百川と吸が如一北よ臨む向ふ津路島
行者が嶽象が端ハ東南小岸へ此方小裸島らしく小時ちは間縫よ十八町
ぞうりと見ゆ眼前の見よ一漸二十町よ過ぐとくや其中小中瀬を
岩そらどく水底滑床の磐石羊腸のとく生よう潮の落よ怡も
百千の雷のひぐ如く程よ渦うとくよ潮の盛んき時ハ
風帆と後うぬよ走らむ是と鳴門の逆落しとりよ鴻巣の勢ひこれ
くハ飛鳥も忽ち小溺よ眼前か言もあく飛島のぞうりへ潮の
満干小風景と変じ陰晴小をかわす異よ其満干沙よ應じて涌し北小
増流一福良よつる引潮ハ東南よ逆上と夥一満干の壇となせり其
高低凡十有餘丈とくや潮の東北よ及ぶと三里けりと深きよ百餘
尋ふつれり湯ハ葉の荷葉よ似う浪の岩ふくらむ梅花の散が
中畠穏うあり時ハ海面偶と布く數千の帆舟風ふ逆く景色







四十九



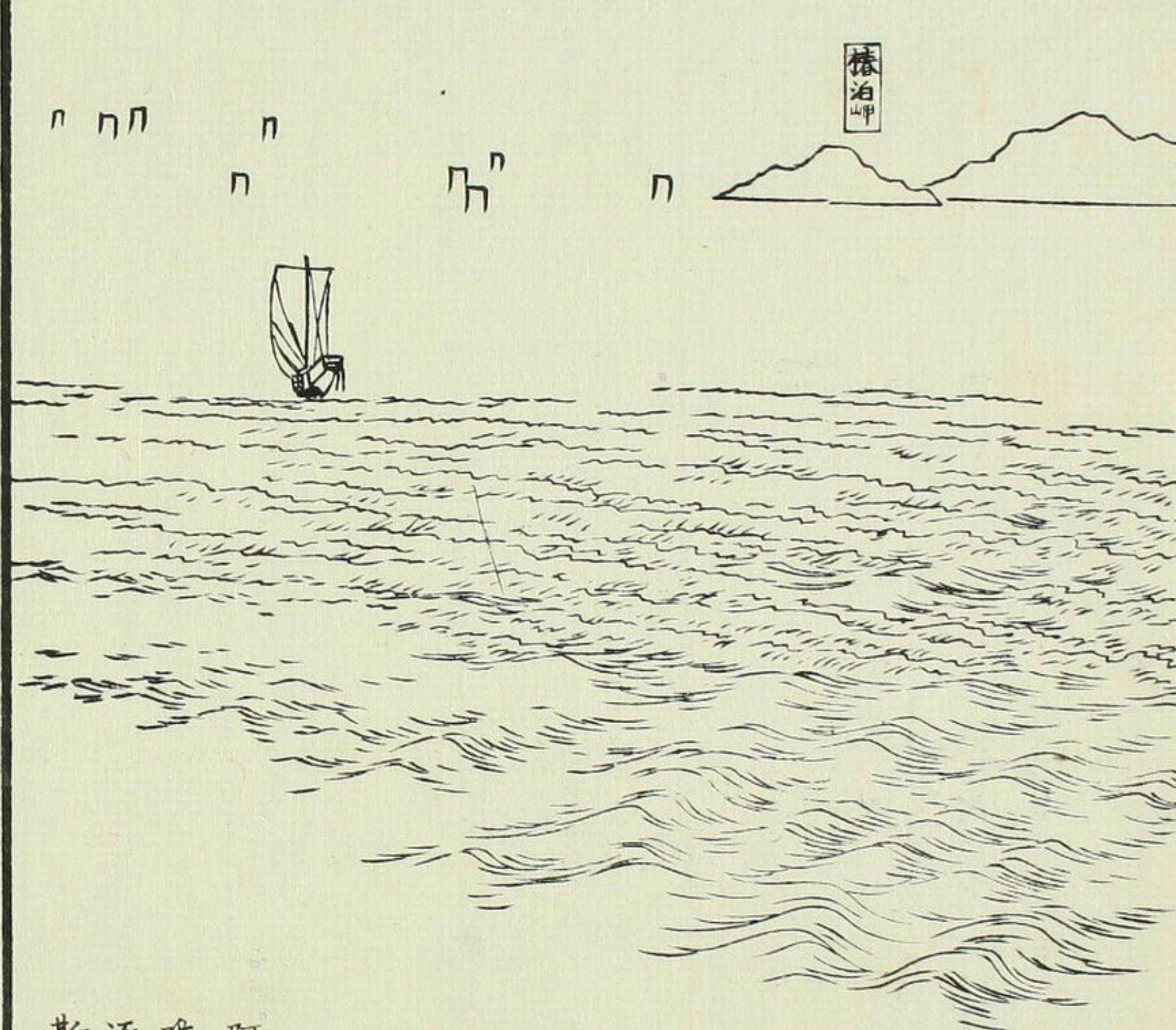
阿波の鳴門を淡路島山小途し東西三里南北十町余
鈎子の口の様ある所西も播磨灘讃岐の海東も
紀州の大海上海底より數百丈の大岩水上不頭見乃
數多あり其岩と岩の間を船行通り不斷涛打さ
れやらすさゝ引汐の時大岩不張て當る水の音へ
百千の雷ふ似て潮烟虛空不立葦々又雨とんだり次
八重の時を浪靜まつて穏あつ此時も小船で往來
し漁船あと到らるゝ此鳴門を渡る時又西より
十分の順風あつても鳴門の潮もしきはどん帆柱の方
引潮と待東よりへゝ次を待つ是を潮待と云
つて淡路の福良とつよ湊まで凡二里餘熟茶二三
服の間みづれより次四五歩までへ來あり六歩より
と浪荒くして乗とし程の汐時追待つあらうと

題鳴門石壁

紀藩之人敬英字世昌
号玉洲謂曰鳴門在阿
淡之間而獨非可稱阿
波之鳴門
逐客秦時焚幾許李
斯教膽寒

四ノ二十

かづきをかづきを
かづきを
ちづきの神
めぐみくじ
與冲



蝶花としづの探り奉りと鎧う寿へ浪ふれて岩すれふ纏せら
荒浪才ぐよと釣人ハニ重ニ重ありニ重ニ重なみ左より別と右より列す宜あ
哉浦人の世と姫くうせ海士がつまみめそりと愛度き西へ真
吉備小豆島とうづ高く消る湖の鳴門と越え紀の海は落す真向ふ舟を
まく障水天と隔つ津路ぬる翠の黛と幻すづけ播广浮る白雪の
峰とつぬ西北のかぐらは遙く目と遠く爰々及んで詩歌連俳も詞と尽
さざ墨客も打見わざく毫と抹ふ感ふるやむ

鳴門逸民 益齋竹叟七十齡誌

物うす涙やかすと秋の声

竹叟

浪うく涙白きよしれ

尺艾

阿波渭津記曰阿州渭津之為景也臨碧海倚疊嶂帶長川布平
原吾耻之嶋東聳高越之巔西連北有鳴門之急灘逆湍暴浪
風疾雷奔即海若之所匿云云

諸國奇跡考云阿波の鳴門ハ塩時小あれバ山海をぐどぐと鳴て瞬
目の間ニ七尺餘あぐる西南の潮息十八町の喉をせする歎くと推す
べ一あぐの間ニ此岩の上と張り越す

著聞集曰簾築師用光南海道を發向の時海賊もあひて用光と既に
許されうり今いふいあく賊徒の為害されんと是宿業のあくとひく
暫くの命得させよ一曲の雅声を吹んと人々海賊ぬけた太刀を押へて吹せ
たり用光最期の勤と思ひ泣く臨調子吹き其時情を群賊も
感涙とたれく用光と免じて刺へ津路の南流戸追からて下へ置す
按小中瀬よう向ふ大鳴門と称し阿波國ニ此方と小鳴戸と称して津路國ニ
属す此は津路の鳴門といふ則ち小鳴戸の邊阿那賀福良等ふ近き所
あづく

新編
津路の追風吹きやど鳴門みか舟人 まんぢば

新古今

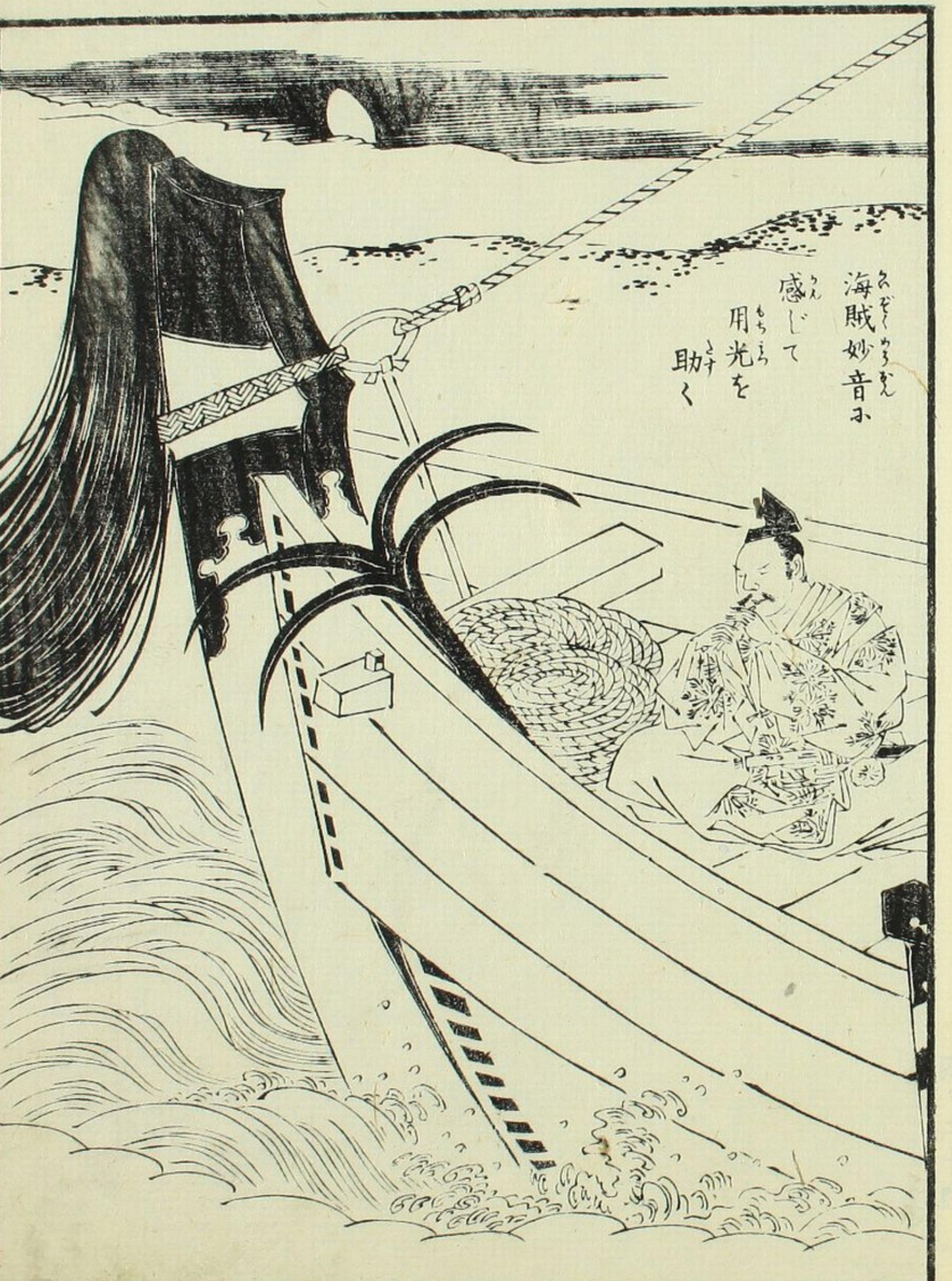
港路 阿波戸 遥々見一月の辺き今宵へ所ぞうのも 船恒

夫木 塙風ふありとぞくふ津路島 そげひよ是をく渡る舟人 民邦 民家

津路島とぞく船のかが間みちあはれど君かぞくへ 岩赤人

三千夙文集鳴門眺望の記云霜月十二日の空も乾きぬりとや鳴門よ耳よせ
てんと案内者獨ど供へ一里半の峰路羊脇とやらり廿餘町の岬瀬之
遠とぞく十丈許よ崎と岩の肩よ打裏り乾搗和布打と鳴門の早
瀬と宍磧の下よ見る向ひ阿波撫養の崎手届く程ありそや漸くと汝
時よあ生ぞや山海のとものと轉々と鳴音きくゆとくや西の海岸る
七尺餘張高げや山陽西海の波息只十八町の喉よ薄震ひ喘息よ音
おとば震も理もあり此中程よ二丈許の岩島びく一寸のひすて安岩頭を
瀬湖うちあそび淀よ底の渦ひづれあひく千瀬の雷車と一音ふ抱きくや
肝魂も消つぞく也水煙朧山を壁ば波嵐漏室の勢ひ利那よ龍門
千尺の瀑布逆天水流き那智三百尋の飛湍銀漢ふらうひづれと灘

谷の巴左右ふ淋冽宍の深さい金輪も見えぬべ追々次第一一流を
走り騒合く且顕され且あまく今餘波の畦々ハ千尋せ拱の白
龍乙とらぐりきよへ金翅鳥も爰る食くらん遙よ涌くら波頭へ
観魚簾と見ゆる通大鵬翁も粵ふ巵言の釣と投よくかとば此隣
濱の漁夫ひつと小き舟船よ巫滄除の舳筵と翅よて只鷦鷯の鱗麌
と追まほほが如くそぐく喝庚らやあれ渦宍の水谷と南風北風縱
横無旱小見え隠れ行透ふぞく花の錦の嘗梭雲の衣の雷抒よう
猶迅りし信よかとく身よ浪風もかくらん渡りらう舡一世の
うれ何と鳴門のうれこの哀ありし形勢よくかく潮の上四尺
許よ減ありされば右の紅阿よ待機たる商舶の人次般りよが吾殿ら
と舳碇引上艤ねく廻し櫓柄握ると見えが焉と大事と氣ども
ちや海岸の燈よやくかくと弾指の中少餘里の目路一帆ふゆ
鷺うねく車渠の於日本一の見ゆのやと餘り小肝心棒を氣羸きて



舍^{カド}ア寺^{モミ}の仮窓^{カマ}よ机^{カシ}一鳴門^{モミ}の眺望^{モウラ}小當寺^{モウタウジ}の艶景^{モウカ}福良^{モウラ}の八境^{モウカ}二丈一卷^{モウカ}

ふけ^ハア梵庫^{ボク}かこゑ^ハ帰^{カム}

鳴門^{モミ}一ぐれ^ハ浮世^ハの松^{モミ}ハ風^{モミ}もな

景^{モウカ}人^{モウヒン}三千風^{モウカ}

鳴門短歌

賴襄子成

天風吹蹙廻瀾紫鯨咲鼈擲誰正視君家鳴門去咫尺
雙眼到處難爲水鴨水潺湲不容刀坳堂覆杯置盃膠
胸吞雲夢無芥蒂知君對此徒哂嘲嗟吾南海未果涉
空望海雲碧疊疊何時訪君傾金尊醉把盤渦當咲鬱

○

鳴門維昔地湧而山出焉謂之淡路其周五十里以外橫於播阿
之間其北曰岩屋南曰鳴門矣鳴門之爲言落際也。在淡阿之間。
相對爲門萬頃之潮出入處也。予文化戊辰春三月望後一日測

量之次至此地得觀其勝夫高山絕而爲門者所謂鳴門也。其東
崖淡路戶崎西阿波姥崎也相隔財可十八町。西崖悉奇石屹然
其間有暗礁々々之西曰大鳴門東曰小鳴門又西南奇石獨立而
蒙草木者飛苦也。此日潮最大之極也故其盛則萬頃之潮至大
小鳴門奔流隱々如雷聲直當飛苦而西南矣蓋天下至險之地
也世人稱之鳴門嗚呼有故哉

伊能敬慎撰

太平記曰康安元年七月阿波の鳴戸俄^{シテ}潮去^{シテ}陸とあり高く峙^{シテ}る
岩の上^{シテ}筒のまくろ二十尋^{ヒロタリ}許^{アリ}大鼓の銀の泡頭丁^{ヒビキ}と打て面^ハ巴^ハ
かく臺^ハ八龍^ハと擎^{フササガル}が頭^ハ出^ス暫^ハ見人懼^ス近づ^ク
三四日^{シテ}經^ス後^{シテ}近^キ傍^{シテ}浦人^ハ数百人^ハ見^ス筒^ハ石^ハ
面^ハ水牛^ハ皮^{アリ}ぞ張^ク尋常^ノの撥^ハ打^ハ鳴^ハと^{シテ}大^{アリ}鐘^木
と^{シテ}大^{アリ}鐘^と撞^クと^{シテ}撞^ク此大鼓天^ニびざん地^ニ動^{カシム}
三時^{シテ}大^{アリ}鐘^と鳴^ク山崩^{シテ}谷^ヲ答^ヘ潮涌^テ天^ニ漲^リれ^ハ

数百人の浦人らども只今大地の底へ引入らる心地へく肝魂も身と副ばげ倒たおりともあく走はともかく四角八方へ逃散なる其後よりハ彌補まつ近付ちかづ人ひとも無いれべ天ある上うり又海うみ中なかへや入いき潮しおハ元はじのてく満まつて大鼓だいこ

ハ見みじ成なり云い云

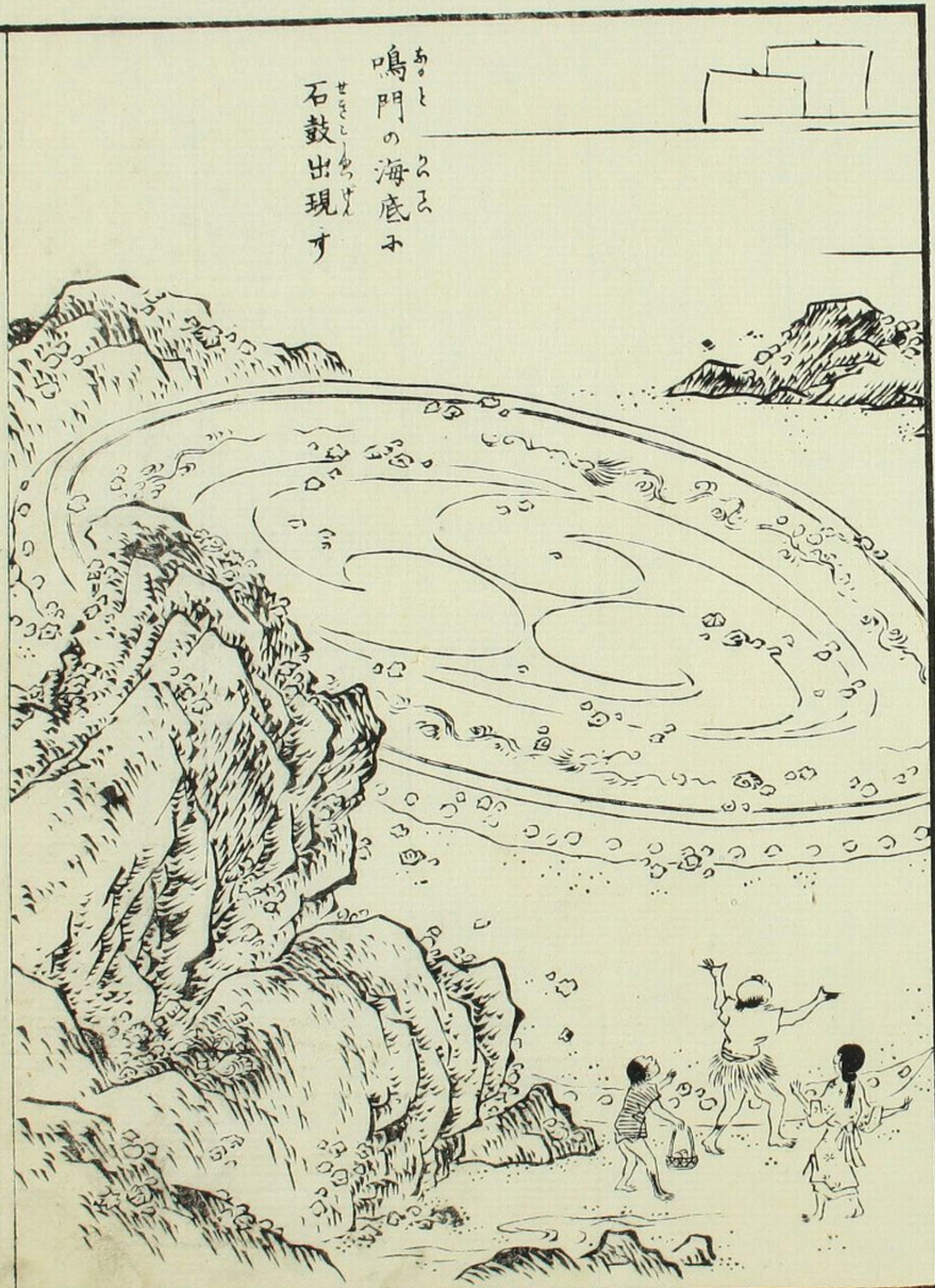
天正軍記曰天正十三年四國征伐の條小羽柴美濃守秀長と大將とし
八万余騎と相揃そろへ海うみと船ふね渡わたしとる所ところ一所いしょより和州紀州泉州の入いり
数すうハ直ただよ淡路あわじの洲しま本もとより丹州たんしゆの人数にんすうハ羽柴孫ひばら七郎しちろう秀次ひでつを引率ひきそくして
播州はりより淡路あわじの岩屋いわやより着岸きしやん云い云大將秀長ハ淡路の福良ふるらと
船ふねと揃そろへ鳴門なるとと渡わたさんとて彼かれ迫門はざわらハ三國さんくに一大だい灘なだ一日いち夜よ潮しおのそ
ひを汝な相邀むかへ時ときハ前まへ小大山こだいさんそれ後あとよ遠去とほへ人の詞ことひとく此門このもんと
越こる魚脊骨いわせと筋つなと生うド一度いちど越こる時ときハ一節いっせつと生うド二度にどもゆり時ときハ二
節せつらう其勞辛あらへんべき時とき船ふね十じゅうものものがれど七花八烈しふはりと殊こと小安須こやす大雨おおあめの日ひ
渡わたる其夜よハ風かぜとある然のりとひど日限ひごんを定さだむ間ま大船おおふね六百般ろくひゃん小船こふね三百艘さんびょう舟ふね

奉行と定め浦々の船頭力者ふとうりきしゃ船櫂ふなざ舵かくを立たべ諸勢一同よ潮時しおと相あそ
鳴門なるとと押出おしし福良ふくらと土佐とさとすり追おハ五里ごり瀬せくとく濤とう舷わんとたくとく或もハ渦うず
卷まき込まれ或もハ潮風しおかぜよりみ立たられけいがくと欺だまく武士士官ととども草卧くさぶて船軸ふねじと枕まくら
船ふねの底そこから伏ふくらはあくに奇怪けがいの事ことりり海うみ中なかハ一の鳴なると動搖どうよう其高たかさ
七八町しちくをとくに近付ちかづてり是これと見みい大魚おおさかなを鯨觀くわがんとあくば山さんとばし皆人みな
舌したとまれ身毛みぞけとく或もハ膽おのこを消きし魂たまと失うふ其時そのとき大鳥銃おおとりじゆと揃そろへららとてり
則そち沉淪ちんりモ云い云

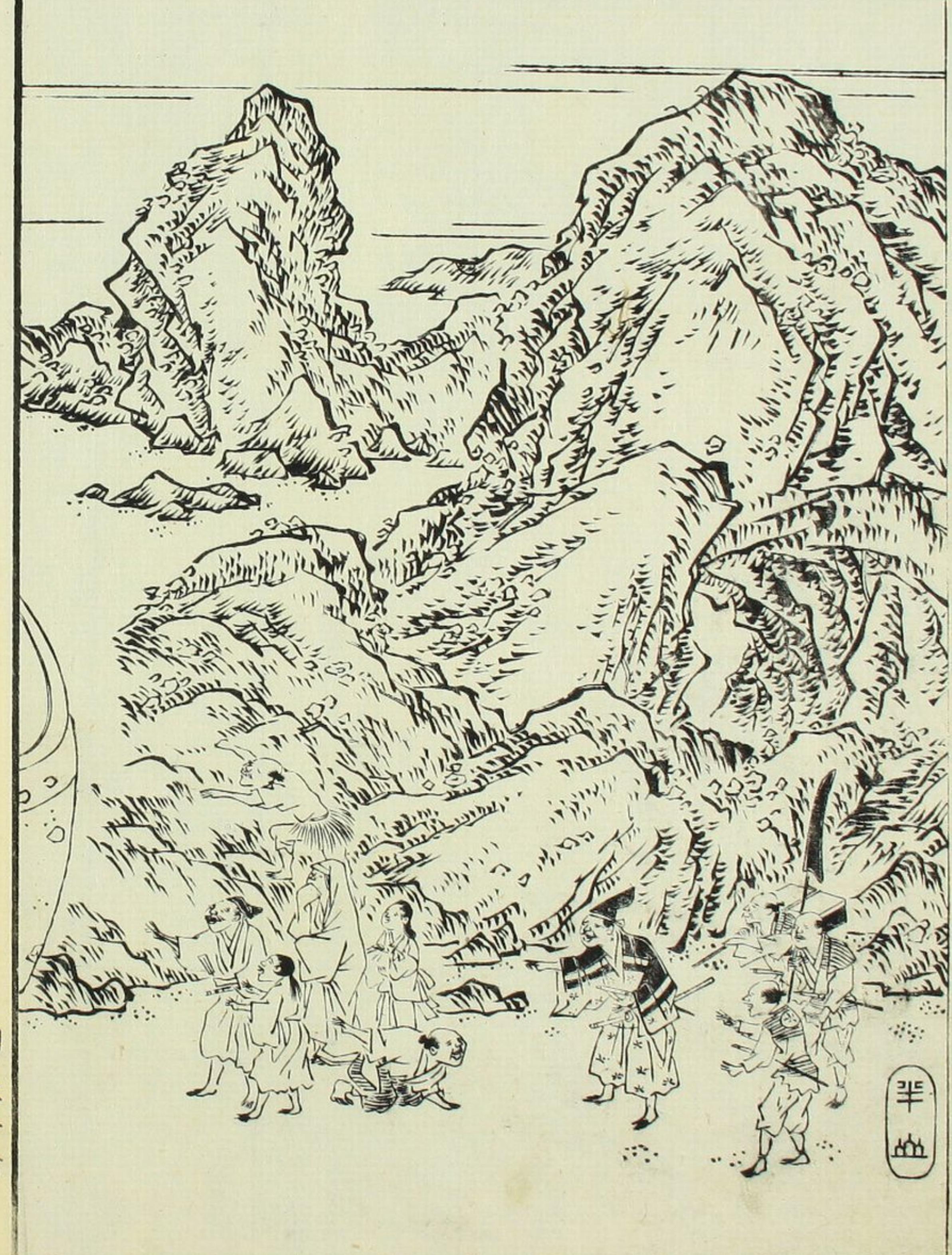
阿那賀浦あながのう阿那賀村あながむら福良浦ふくらう山やまと關せきて西にしとあくねあくね一說いつせき細長ほそながとくと福良の浦う阿波あわ
當浦とうの志知川山しそのの南みなみと有あ南北ほくなん長ながく出岬でみさきと北きたハ圓山まんざん中央ちゅうおうハ鑑崎かげさき南みなみ
鳴門なると寄より海上うみ一里半許いりと阿別あべつ撫娘むなむすめの山やま見みくく船着ふねハ鎧崎よろいさきの南みなみ
りり人家じやう多く立たれる。阿那賀溪あながせき同村どむらの山やま中なかと出で海うみ入い

宮の端は同浦淡口あわじの南みなみの出崎でさきとと春日かみひの神社じんじゃと以もて号くわく
春日神社かみひじんじゃ同舟着あわじの傍そば紙園社しじんしゃ年德神祠ねんとくじんし住吉社すみよしじん本社ほんじんの傍そば社僧じそう春日寺かみひじ例祭れいけい九月九日くわくくわ神樂かぐら渡御わたみ

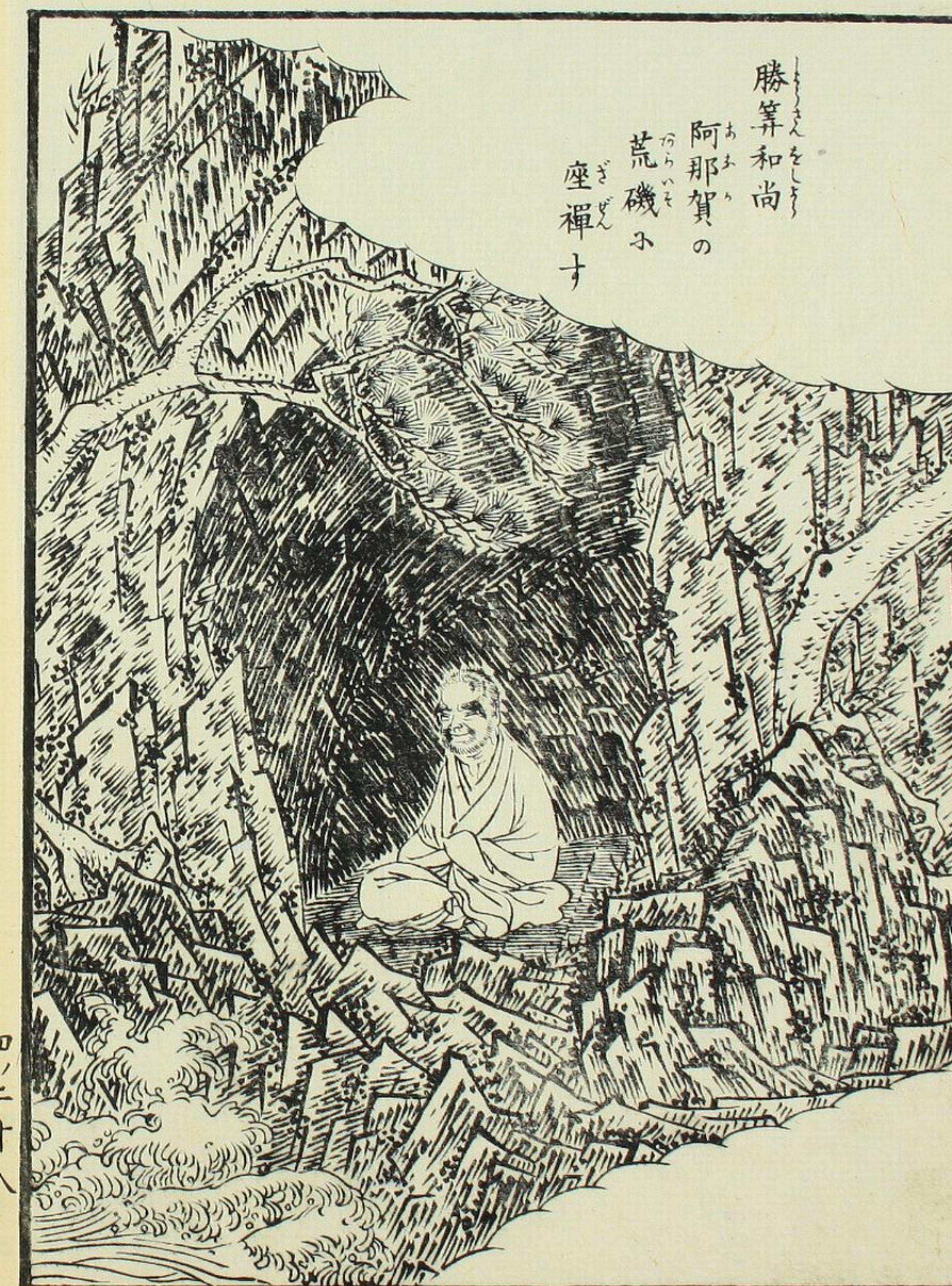
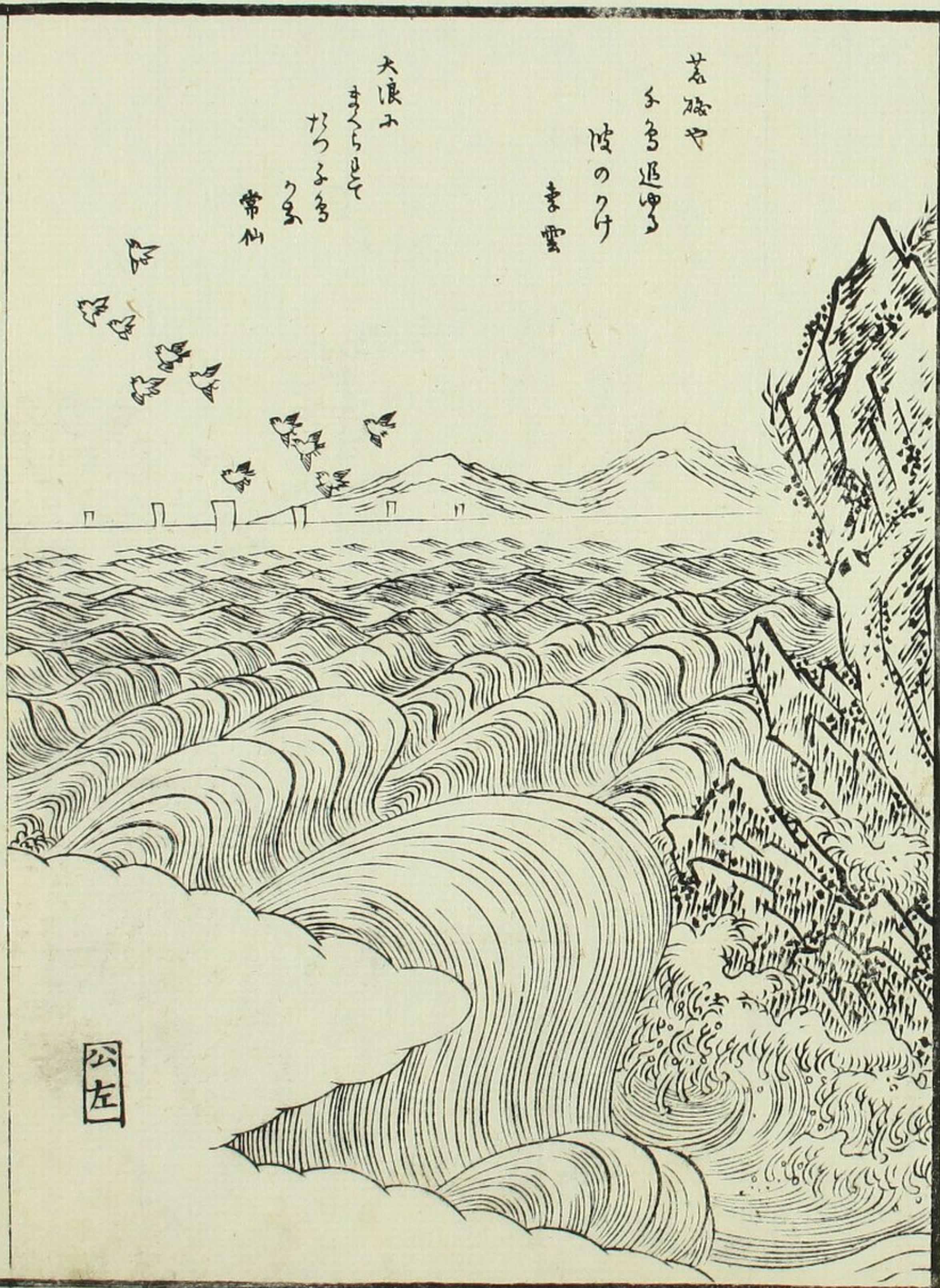
鳴門の海底
石鼓出現す



四ノ二十六



半



村中ふ廢寺の趾

道化寺趾

等成寺趾

西臺寺趾

地藏の小堂

抽の河

里人西佛堂

林叢

小堂

大門の池平等寺趾佛の原皆廢跡ありとぞ

古城墟

同村の東より城の山より田園の字を堀といふ城山懸崖大石なり地名を石津女とり林叢

りる古井なりや是ホ城主の遺名かん乎

一説ニ橋本隼人佐居城に天文中子没レ其子主水正永想ハ三河國ふ退去はと云

雪丘

同村の西竹生山の頂上より津井阿郡賀伊加利ホの最大の高嶺

早天の年里民雨と並にあらだ奇瑞

と云

烏帽子峯

其形似ると以て名づく

讃岐岩

同山中みたり此地より讃岐の地眼下不らま

新羅谷

同山口より大唐ヶ原の山中よりへ蕃人と云置く故号と云福良浦の西の濱邊も

仲野安雄翁

著述の書籍世々安永七年没享年八十三

大人足趾池

同村ニ一所一ハ大唐ヶ原よりて田とあり一ハ村の西より池あり畢竟かくの

搖石

新羅より山石の坤一町より下より黒き色の大石二ツ累り上の石の高さ七尺下の石の大きさ

雁子崎

同村の海辺の岬みて播磨路と對ひ眺望りて絶景あり

龍棲山

同村の西より古ヘ竜ゐ山中ニ棲りと云又南の山の絶頂ニ薬師岩と云あり又寂黙谷と云所隠者の

龜石

仲野村草谷の口より形似と以て号く甲の上の廣さ十尋余と許高さ凡七尺余

翁媼石

同村の支邑仲野の里正と通称廣助或脩竹盧と号い生得強記と云和漢ふ博識ナリ

翁媼石

此地と俗ニ翁媼がちまと云

岩の間

小祠と構へ登立の明神と号ひ故ニ世人登立の翁媼とも云

名高

一月三日祭祀御湯神樂と奏ひ

感應寺渡

可堂の事と云

渡

渡口の川幅凡せ間餘平生ふ渡舟一艘を置き岸ふ綱とつけ渡る者手

づく是と曳く渡る國中の一奇といふべ

古津路感應堂の所と云

漢口神社

漢里村より延喜式小出祭神蛭兒尊と云或云速秋津日子速我津日賣の二神とも云

延喜式曰淡路國三原郡漢口神社

三代實錄清和天皇貞觀元年十二月十四日乙未授淡路國

正六位上漢口神從五位下

同光孝天皇元慶八年九月廿一日戊寅授淡路國從五位下

漢口神從五位上

長寛勘文曰天慶三年二月一日丁酉有諸社位記請印事
去承平五年依海賊事被祈申十二社位記也正四位下

湊口神

常盤草按云朱雀院承平四年より山陽南海小海賊起て官兵これを
征伐次同年海賊の大將藤原純友伊豫國ふ起りて阿波淡路をどと
掠め阿波分藤原國風も敗軍して淡路小來りしより湊口神ス
祈られへ此間の事あべ

八幡宮

同村三町本殿應神天皇と祭る仲哀帝の社ハ本社の左に仁德帝の社ハ右の傍スあり
荒神の祠宝庫スハ拜殿の左右に隨身門石鳥居等正面三間

智積寺

八幡の社地の北に並ぶ八幡宮の別當あり龍室山蓮花王院と号す本多大日如來護廣堂へ

鐘堂

本堂の南よりノ不動明王と安徳寺三十三体の觀音と安徳薬師堂門外の東傍スあり
鐘堂ハ八幡宮鳥居の東傍スあり

古城蹟

同八幡宮社地の坤三町許より世ニ安宅治郎の居城といひ上段中段ありて矢倉臺
天守基スと称す安宅治郎其傳詳スべ

里老云安宅治郎殿射道小達ス此澳と往通ふ船と目がけく矢と射スふ
一度も立ぐる事スとぞ按云由良湖本三野畑炬口千草岩屋安呼スど

皆安宅氏の居館ス若くハ當城の安宅も一族スんスとスふ
右城跡の西の方田圃の中ニ安宅殿の古墳スといひ傳う五輪の塔あり法号磨滅
大永六丙戌年五月廿五日の文字幽ス見ス今小祠スとスて古墳
の上ふ覆ひ安宅明神と称ス崇敬ス

宇佐八幡宮

西路浦村ス豊前國宇佐の太神と勅請は故ス号く若宮ハ本殿の南ス稲荷祠

藥泉寺北の川邊スあり本多阿弥陀佛と安徳

例祭正月十五日八月十五日十一月六日を用ひ別當

國清菴

同村山田池の西雉子谷の下ス禪宗黃檗派ス也

本尊

釋迦牟尼佛并達磨大師三十三軀觀世音と安徳

勝算和尚之像

長凡二尺許

古厨子の前ス左右靈牌スり

表云當山開基第二代臨濟正宗三十五世勝算老和尚覺位

裏云元文四未年三月十七日

全當山三世臨濟正傳三十六世上仙下賴靈大和尚覺位

全寛保三癸亥四月九日

當寺開山ハ攝羽西成郡難波村慈雲山瑞龍寺二代寶洲和尚す。其嗣世勝算和尚ハ瑞龍寺前住鐵眼禪師の弟子す。貞享元年より此

庵室小住。

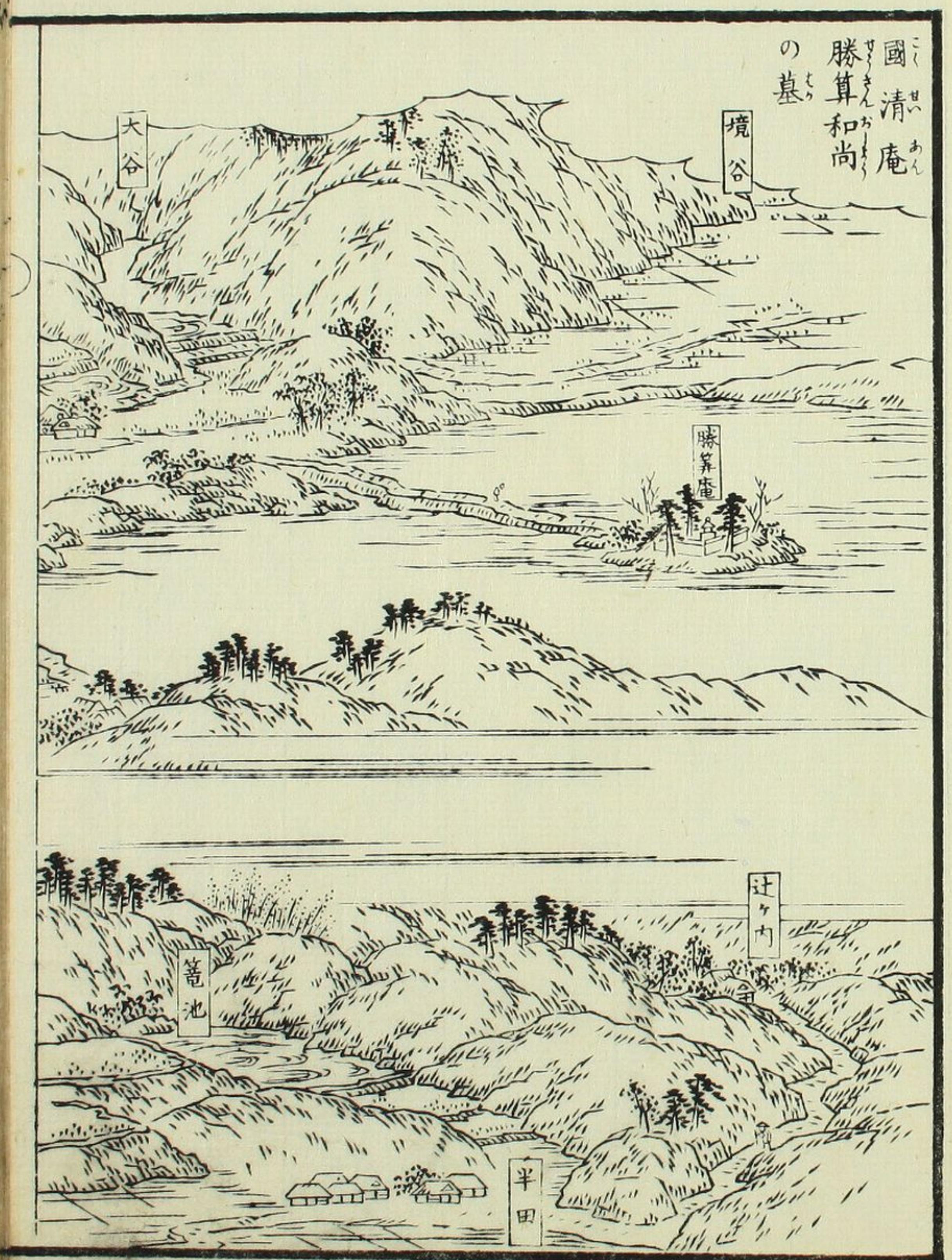
一説云勝算ハ原此浦の産す。幼き時より浪華小出で太刀屋某の家小撫育せられ鐵眼和尚の弟子とあり。此僧法華と誦ひるを数千巻。幼より多病たり。良薬と自製して丸散の靈法と調煉し。既に身堅固なり。道德衆小勝と聴見の多事と失却する所なし。或は海濱遊歩。荒磯の岸ふ座禪。今尚ある海迎。幽谷小入で出ざる。三四日又ハ小舟。鹽の舟。近來まで寺存セ。棹。獨遊。鳴門と渡る。又洋漁。櫓械と棄て漂ひ。自ら其舟の志。所行せ。又畚持物と藏。有り。往來人の家より魚肉と施せば受く。これと食ひ世俗称。畚和尚と称ぶ。臨終の時。自ら沐浴。法衣と改め。佛前ふ座禪。頭北面西。入寂。年七十七。遺言。火葬。全體。舍利不化。

勝算和尚肖像



半
四

勝算和尚肖像
黙仲勝算



又奇たり則其舍利今猶堂内尊祭ひ又和尚調煉の藥法今猶當
菴より施薬をと聞也

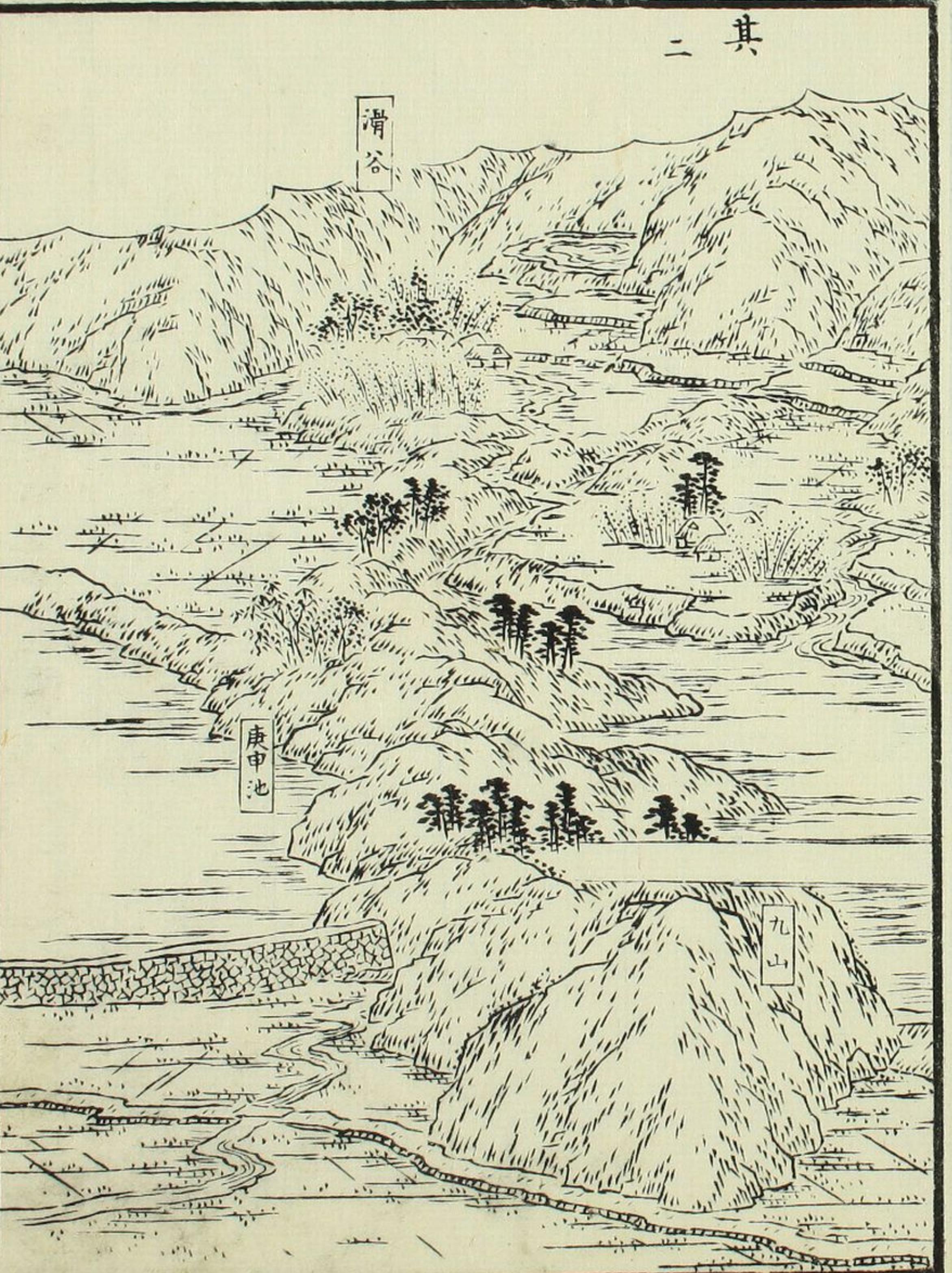
或云勝算和尚幼稚ふく其父貧しく算と育くひと能くば浪華小
遣く賤家は僕仕やむ一日其主翁先祖の忌辰小當ろと以く供糲せん
よく算く豆腐と買く真往道みく童の雀児と弄ぶりく算これと
見く小忍びど乃ち錢を与へくあきと求め放ち助けく豆腐と求めばくと
家え飯る主人怒く之と責算依然く答く曰佛の日く豆腐と
供養くと苦禽と放ちゆうと何れが佛意よ惱くんや主人大ふ感じ是
凡の童ふあくべく即ち難波瑞竜寺の鐵眼禪師ふ托く佛子と為
しむ熟禪の後瑞竜寺は住く老く故郷ふかく國清菴ふ住ひと云

鳴門みの詠

世の中と思ひもあきて渡る身ハ阿波の鳴門も長閑と見く

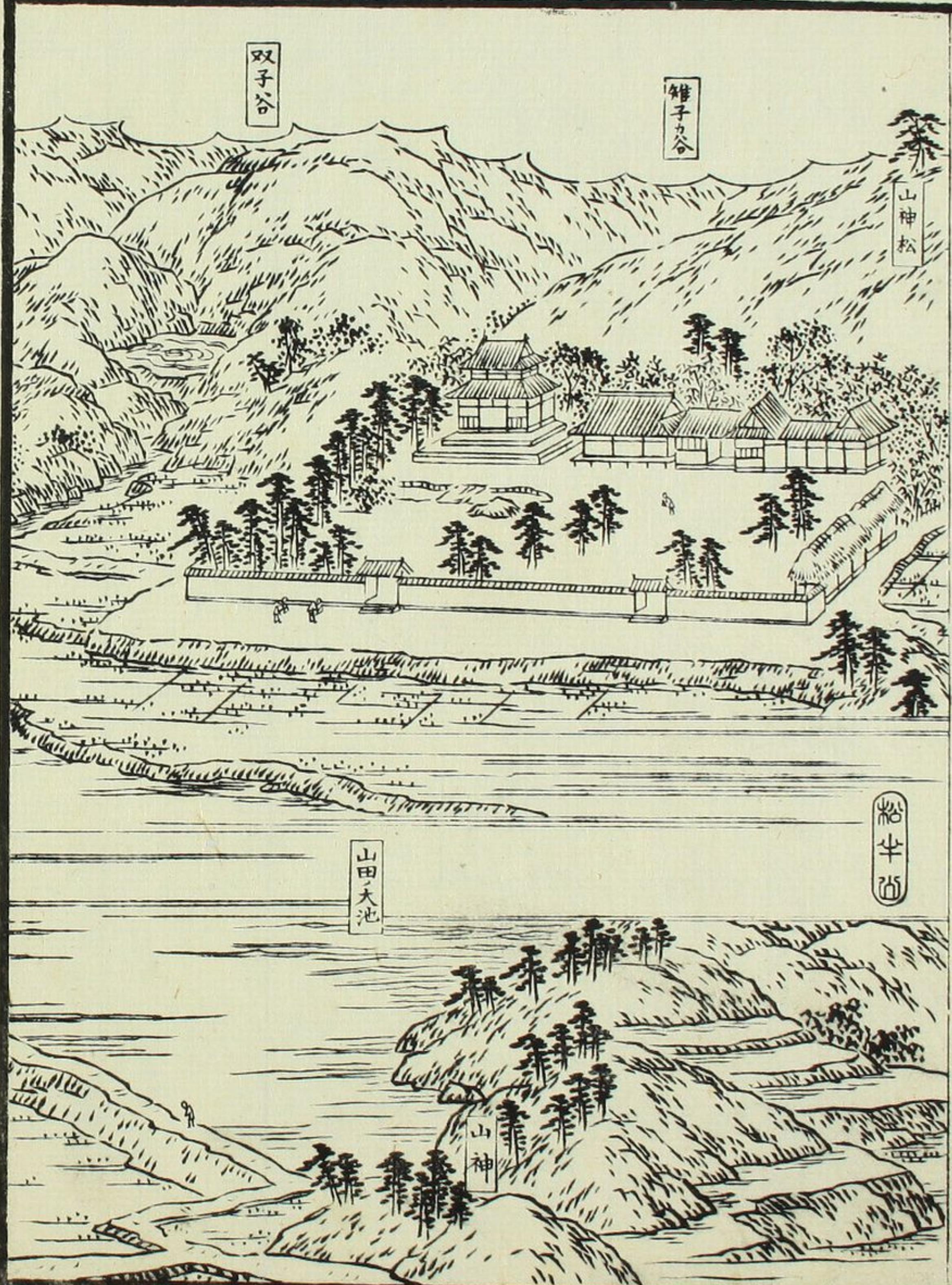
病中の詠二首

其二



四
廿三

双子谷



上もあれ佛の道とりとめてへ余も身もゆむ物には
骨と粉小身と碎きとも法の道りとめて止ひ我らもくか

遺偈

本來面目 具足圓成 七十七歲 幻死幻生

未三月十七日

勝算臨末自書

什寶勝算和尚所持遺物

馬腦石正觀音瓦善財童子水瓶ホリ 長凡一寸五分唐作

水晶數珠一連 二十五條袈裟 柳染衣拂子一柄 背一足

法華經八卷 平生ニ讀誦せられ所ト云

笠一益 洪張色黒レ

畚

一 常ニ法華經ヲ入如意カケテ肩ニカナ
遊歷セラレント云故ニ俗ニ畚和尚ト称ス

定惠島 境谷池の小島也國清菴より

且の方ニ町許ニナリ

勝算和尚石碑

右定惠島ニナリ周ニ壁と葉き
内ニ石塔ナリ銘ニ云

師諱元妙号曰勝算姓太刀氏生于本縣幼而祝髮應

化無方入凡入聖不管否臧開創兒岳移住槩峯寓洛
峩阜董提瑞龍四衆傾膽十方欽風度生念薄養老島
中天資朴素誦妙法華萬三千部常厭世諱書幻生句
忽入那伽爲不信者留舍利羅爰承遺托取收化灰以
爲塔樣團團玉推巍巍輪角千古垂彝香賓花容共證
無爲國清嗣法小師淨靈合掌誓首謹記大略

于時元文五庚申歲三月十七日小祥忌晨

國清寺舊地

片田北村ニナリソヘ此地也あくま廐寺と名ふ

鑪河

奥河内より出て口河内を経て飯山寺佐礼尾の間より北村

聲明寺

片田北村の後山也又飯山寺村もする山の嶺と美山と云

新ニ國画

西神代の三社也寄附し開眼導師ハ國分鏡智院主

施主中島村塚の坊也又古物の鏡鉢也朝鮮の製也

飯山

片田北村の後山也又飯山寺村もする山の嶺と美山と云

其佛院の廢址あり灵山也又飯山寺の奥院也云

讀解ニ所謂飯の山とづく小岡ト

家山

片田北村の後山也又飯山寺村もする山の嶺と美山と云

長宗良忠

當山の佛院を明山と呼サセ

寶光寺

右同村より真言宗

實弘上人墓

成相寺と建立

鶴遊山常樂寺

中島村より真言宗大覺寺末流舊名篠の坊と云ふとぞ

大屋

中島村より大屋氏の居たる古跡と云ふ林叢の中より古墳あり石佛石碑石燈籠あるが分列してある
見ゆ正へ大屋氏の墓所あり然れど今俗に廢帝の陵ありと云ふ傍より小祠を營し石燈籠を建

廢帝の陵のて尚別と云ふ記せば云々と署

廢帝の陵のて尚別と云ふ記せば云々と署

常磐草曰大屋家記曰先祖田打始莊司神代小穀種と時廣やと云々世々小耕
作の道ひとけ農業行は故不是と天下耕作の祖と云其孫裔西神代
庄と領へ終路の御百姓と云々是を廢帝遷幸へと十一箇所村不
住せりへ時第三の皇子松丸君を養ひ大屋の家を継へむ惠林院
公方入國へとひく大屋の宅ふ住へ其子義正大屋の家を継り義正
ハ先庄司の外孫なり義正の子義信の時本領を没収せらる
信長公の
義信の子と義久と号ひと云又大屋と相生國とも書りあと言傳ふ
天平元年輪旨一通景雲二年輪旨一通建久三年頼朝卿よりの
天平元年輪旨一通景雲二年輪旨一通建久三年頼朝卿よりの

下文一通

中島村より松樹茂り群立る河と云ふ事史詳る後人神代の名と神代の
古跡ありと云ふの説と言ひて當中島村より西と西神代と称す

難波溪

北村より松木河の下流に入

鶴來山神應寺

同村より真言宗へ當寺阿弥陀の佛頂あり灵山の本尊と云々又毘沙門天

高天原

中島村より松樹茂り群立る河と云ふ事史詳る後人神代の名と神代の
古跡ありと云ふの説と言ひて當中島村より西と西神代と称す

明山長壽院古趾

同村の後の山明山より志知の城主野口孫五郎長宗天正中
明山の佛院と明山の絶頂と稱す

松本河

畠井河国衙河西山河の下流中島より難波佐礼屋の間水無瀬と云々鑑松木の向より志知
北村の組橋と云々志知河山王橋の下より西路を経て江尻より八太河掃守河木の下流
と合流する古車路可堂の口より

伊勢明神

松木村より伊勢の宮とも云内宮勧請以荒神祠本社の傍もあり
例祭正月十日八月十九日駆馬相撲會真行十二月廿二日社僧聲明寺

當社檀の棟札

天正四年丙子十一月十日大檀那野口孫五郎長宗
又慶長八年元和元年等の棟札

大願主結縁

有長ニ又五寸許

傳云文祿年間

朝鮮の役小加藤左馬助嘉明出軍渡海の首途小當社小
詣り戰場小功めん事と祈り勲功有小於の食祿三分の一を献じ

報せんと誓ひ一時社檀より小蛇現出一とぞ

宝暦五年の頃社前小祭礼の相撲會ありて時群衆の中に嬰兒を携る者あり誤て拜殿小居屎をまわす時又夜あけより拜殿の柱火ゆりて燃付く皆驚き水としき漸々火と鎮む相撲もとくとも内不終り其昼時分ひ柱を見よ糸焦げ跡常の如一是ハ正居屎の穢と清めしやんこめ假よ火と見せく拜殿を清めさせおひとも哉と諸人奇異の思ひとたゞくと云

河童松 同本社の前子あり大樹の古松なり

傳說小野口氏當所不在城の時びきの川辺や農馬と繋ぎゆりて時河童一個の法師と斐ドリ馬と牽く水底ふ入んと手綱とたゞり既て肛門ふ至りと入て膽と掴み出さんとひ馬の驚き駆出に河童の手小長き綱と纏ひもづくんとそる隙あく馬の勢ひ甚しけれべ爲方をくく引むられあぐ伊勢宮の境内より尤城廓小近き所なれば往來の士商早く河童と捕へ縛り罪と責既小殺し捨んとひ河童の手を合せて屢

スの体かられが死と免へて以來安郷の人民牛馬あど小害をべくもと固く約く河童とゆべく則ち其儀定と此松の本小セ故小斯ハ名づくま夫よりく此難小逢ふ者あくらむ

志知城墟

同村の乾あり本丸の高サ三間方四十間周塙幅三間許外堀尚存

城廓大畧表門辰方向裏門丑向市店跡長百四十間幅六間堀ゆり其南方小市場寺内の名ゆり其巽の方小丹後田豊後田又北の方小築地の内丹後屋敷八重垣をぐつゝの歴号ゆり天守臺十間小五間本丸の高サ三間方四十間内堀の幅八幅南の方小表門の趾足の方小裏門の趾土橋の趾窄の趾等今尚存に伊勢宮ハ城内より馬場ありて鎮守ゆり 馬場の長サ七十間 中二間 味地草ニ委く出按又延元元年楠正成戦死し新田義貞敗軍の後後醍醐天皇再び駿山より遷幸し義貞京都と攻るの時淡路國阿万志知の人山門小至り阿弥陀ヶ峯小陳と取細川郷律師と戦ふ同三年吉野先帝崩御しより時吉野執行吉水法印宗信曰世の危うきと見よ命と軽んざん

官軍ハ沿路國ふい阿萬志知の徒義心鉄石の如く一度も変せぬ者ども
なりと賞せり又暦應三年股屋義助南朝の勅と奉る伊豫小下向の
時も阿萬志知の一族武島より船を汰へ備前の児島へ送るとぞ太平記よ
其頃細川師氏下向へ沿路岡の官軍と征討し守護職となりしより
志知も細川小服従せりあつて則細川師氏ハ前小云養宜の館より住
一沿路守小任べ此時も野民よりはよナリヤドリ余後細川の代衰弱不及
三好氏りつゝも權と執ゆ。

小より野口氏も三好の族となり一也

天正十三年志知城と加藤左馬助嘉明小賜ふ嘉明ハ始孫六と云天正十一年秀吉
小群を抜んで敵不接する者七人あり是を抑が給の七本鎧とり加藤孫六嘉明其一もイ秀吉
これと賞一より五千石と加増モと云

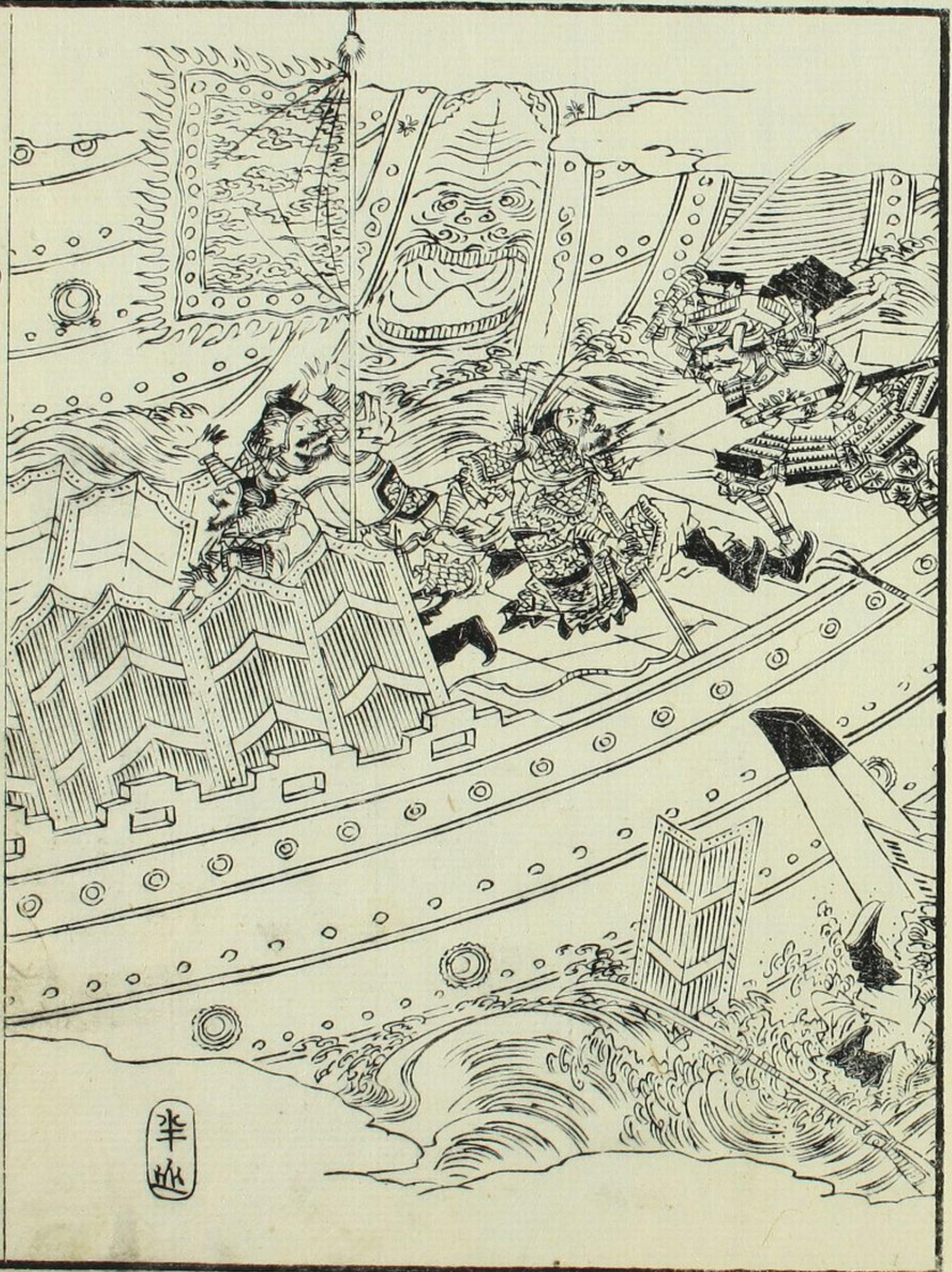
文禄元年秀吉朝鮮征伐より諸軍渡海を此時加藤嘉明ハ其兵七百
五十人と卒一志知の城の南より蟻が瀬ふく軍艦と造り行裝既不成
發向をとりふ

文禄二年六月諸軍朝鮮本渡海に敵軍唐島とづる地ニ戰舸數百艘と調へ

日本の兵と拒んと此時加藤嘉明諸軍小魁一小船三艘ニ敵船本近づれ
大小舟軍して一大船より飛入力戦して敵兵數多斬殺し味方僅りと敵船
數艘乗捕屢勝利を得る其餘戦功拔群あり小より秀吉もと聞し
く感狀と賜る其文豊臣家譜太閤記見へる加増りく

傳云志知城ふくの本知六万二千九百石ありと加増りく十万石
安澄云加藤嘉明天正十三年志知城ニ未り所領一万文禄二年伊豫松山小
移りと云い說ひ又村老の說ふ天正十年ニ未り文禄三年小伊豫小移
と云常磐旱天正十三年ニ未り慶長二年松山小移り其故ハ
天正十一年柳ヶ瀬合戦より嘉明其一才を此地よりあづけ文禄
元年朝鮮より人數七百五十と出一當城より軍船と發一翌二年

九月十二日卒行年六十九歳と聞古



和親の事よりて九月か帰朝以後五年を経て慶長二年二月再び朝鮮と征候時又高名よりて太閤より五月三日朝鮮陣中へ感状と賜ふ今度の功よりて本知六万二千九百石の上へ三万七千百石加増下され十万石とする功汚り小よづく也云云

容信按云文禄の朝鮮攻の當城より出陣して翌年帰朝して柏山へ移り一も知れど感状の文小依て領地六万二千九百石より當城小居とくとせば脇坂氏も五万石より洲本より在城などバ當國の物成ある兩家の行足らば若くハ六万二千九百石を分ハ他國より領せられ、う藩翰譜より天正十年の秋六万三千九百石より伊豫正木の城と賜るとあり又船軍の事ハ太閤記小文禄二年二月の事より豊臣家譜より慶長二年の春の事より脇坂氏の碑より七月七日の事より林道春の撰と斯異あくハ覚束なし只大河内秀元が記があくに所心詳く彼日記ハ自ら太田毛利守一吉小隨ひ彼國小向ひて日毎の事と記と所く慶長

二年の戦事一決せり此年三月十八日本朝の人太閤の仰と受て五月廿三日より大坂と云々七月七日か釜山海小着同月十五日此戰より加藤左馬介唐昌ゆく一也云云此文よりとハ豊臣家譜の感状の文五月三日とひりと齧に尚朝鮮征伐の軍記諸説區々年月の遠い又少くびとくとも事繁るれば畧之嘉明授封の後三宅丹波守代官として志知城小入又慶長六年石河紀伊守志知城の石壁と壞ちく感應堂の墨と禁示して

堀部宅地趾右城趾の邊りより奥土居とす所より加藤家の老臣堀部市左エ門長勝とん住すと太閤石城趾の南の角より傳云秀吉公の腰とくわづひー石とく

徳永八幡宮徳永村より別當窑續寺例祭正月十五日八月十五日と用ひ又十一月六日神事あり

城之腰又城の本も云同村の乾ニシテ古城此城主姓詳ひ一説ニ志知野口氏の長臣

階出邸趾同村ニシテ今畠号ニ階出と云一説ニ新村の城主畠永越前守の家臣階出九郎右衛門居宅の古趾とす

志知組橋

志知の北村より松本河より架す土橋也

光明寺

志知川村より龜島山とす淨土宗の寺門へ志知古城の時加藤家老臣堀部市左門營建の棟札

近き頃まことに有りても門も朽れ失へしを

畠山尾張入道ト山終焉古跡

天文三年の春畠山ト山尚頃紀州の野辺湯川と合戦一の大敗軍一終ニ爲方
あくべく其場と遁き船又棄て沿列へ落行あひされど運命や尽果え
幾程もあり重病と受うひ河内へも紀州へも立飯ること可ばく淡路國
光明寺とり所ゐト山禪門死去せらる行年五十五歳とを聞へし此
禪門へ去る應仁文明の乱は大功と立らるゝ故管領政長の一子みて代々
公方の厚恩と蒙る家の繁昌他不超され世の人望も輕く智謀武勇の
器量りつゝ毎度大功と頭ぞ實小公方家一方の權臣累代の管領あり
共近年戰國多く衰運惟窮なるみや他國小落魄一一身まぐり給ふ者ニ云
云

續應仁後記一見へ

志知川 松本河の下流から海辺へりびとゞ俗ニ志知川浦とす又漢津井と隔て阿那賀の

山王權現社

志知川の傍より

和名類聚抄曰淡路國三原郡幡多波

神本八幡宮 下八太村より例祭正月十六日八月十五日社僧神本寺うれと守護

神本驛古蹟 同村の中より神本とり所あり是其古名の遺るゝ也

續日本紀曰高野天皇神護景雲二年三月南海道使治部

少輔從五位下高向朝臣家主言淡路國神本驛家行程殊

近乞從停却詔許之

按往昔の大野驛より神本驛より國府

復列と經く福良の駅を行へ

あり然るふ此神本の大野福良の間はあり行程近く畢竟無益あり

とく停りあひ常磐草

自馴盧嶋 同村より圓行寺川の傍より田園の中より小丘とりよ

自凝島神社 則祭正月十日六月八日八月十日十月二日の夜せんゆを事とす

鶴鵠石 大鷹奈とりよと修行於俗よせむわい事とす

自凝島

かのこうじま

鶴鵠石

海原水

あひらみの

じまのたら

もれて

我まへらきの

御代を

そしき

師光

淡路島

あぢまきの

し万も

まくろ

おのころ

まふ

まやまらむ

土麻呂

二神の

あうごろまよ

あかりまよ

まづうふまよ

まづうふまよ

大平

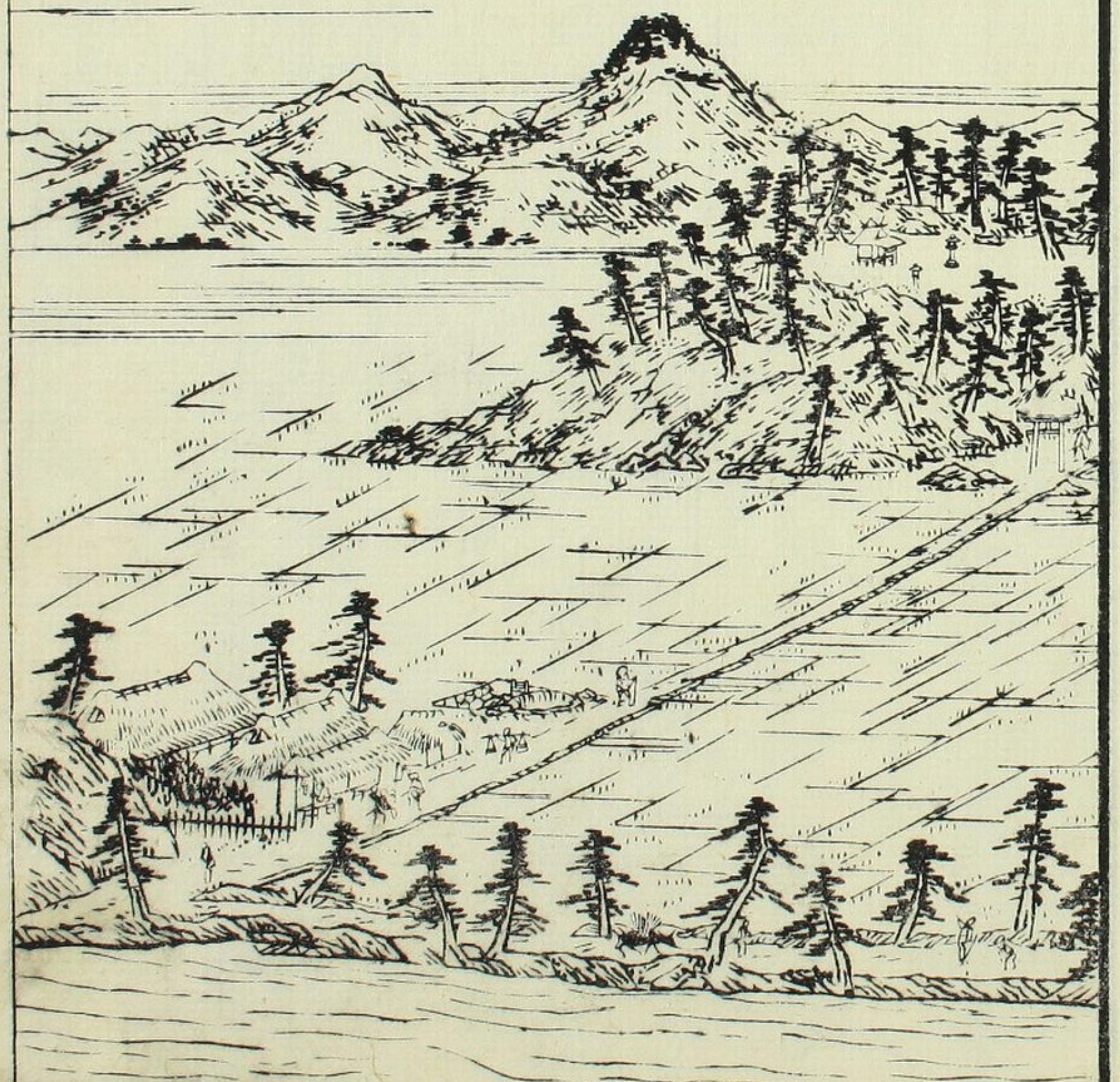
二神探碧海

一滴瓊矛凝

修忽生茲土

曠々日月昇

真幽蘭女史



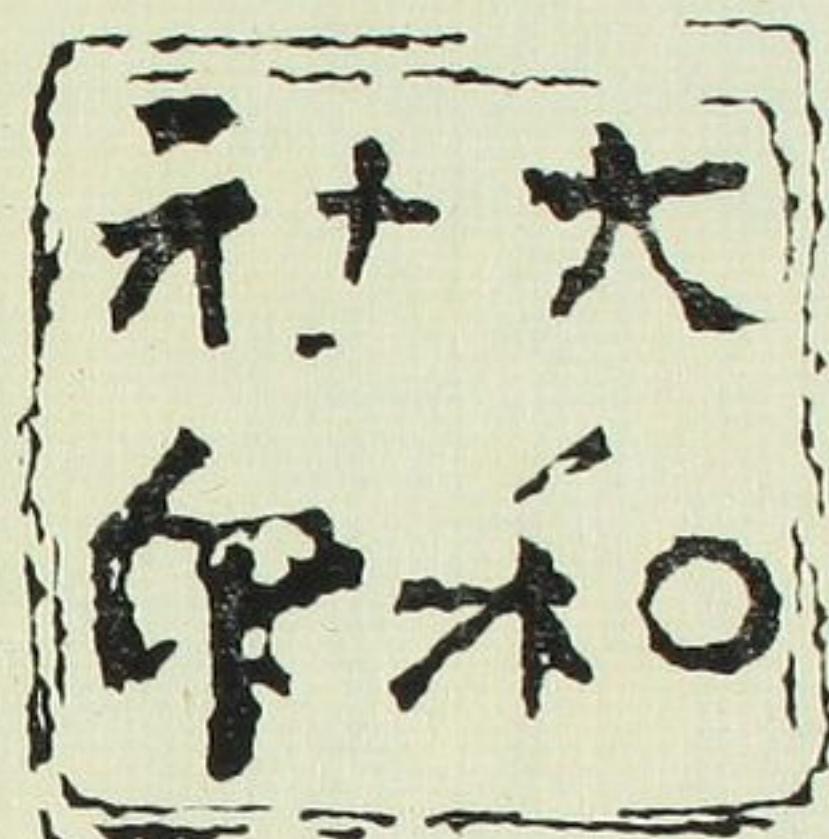
延喜式土稅上曰淡路國大和大國魂神祭料八百束

同

名神參二百八十五座大和大國魂神一座

淡路國 座別云云

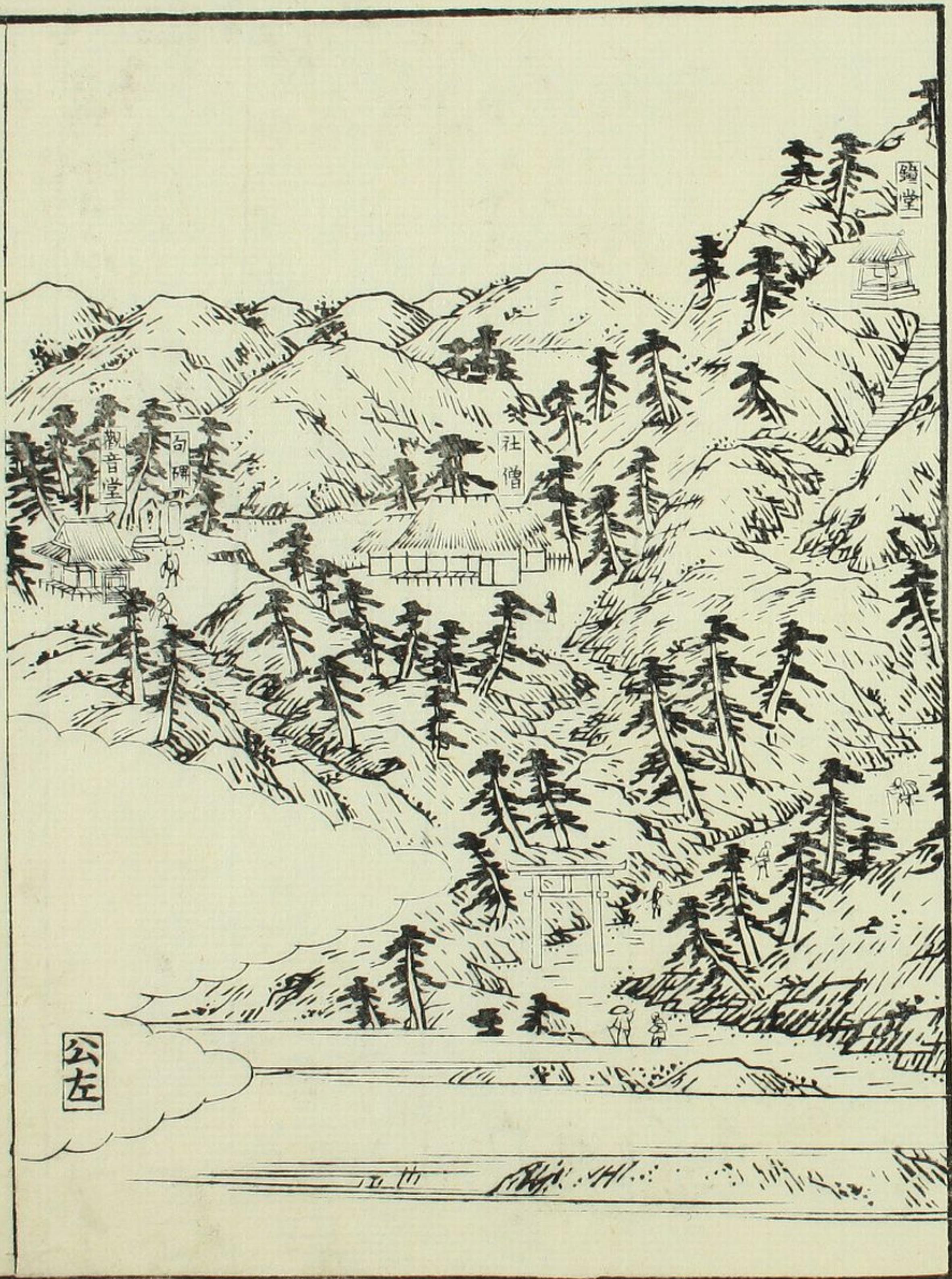
什寶古銅印 其文曰大和社印



。近世神社の境内より壙出する所とぞ
全焼爛れし字章を損ぎ且柴氏の古銅印の記
り左より字章を出しある印の寸法制度と合ひると
難ば然れど按よ火小からず焼縮てくるありべし
又余り大に古銅印の寸法二寸のまゝば大小
りて之集古十種の印章の部と見てよし

古銅印一顆文曰大和社印淡州三原郡上八太邑二宮別當延壽院所藏也往時神祠二宇東西相對以祀伊弉諾伊弉冉二神故稱二宮他猶有觀音藥師等堂及本院一子院七本院即延壽

院八十年前羅火灾神祠佛堂時蕩然尔後不能復舊今之所有二神與大和國魂神共一宇而奉之他唯觀音堂及本院耳此印古昔朝廷所預回祿之時失所在後掘而得其山中頒之年月則不可知是寺僧所傳之說也二宮者非二神之謂其實大和社當時對一宮而呼故有是名耳是常磐草之說也按延喜式載淡路國三原郡大和國鬼神一座即此社是也後世因二宮之名遂祀諸冊二神以應之又浮屠所據加以觀音等像以為香火之場先王正祀隱晦幾亡猶賴印之存證據的確足正因襲之訛於千載之後則一塊之剥蝕安可不寶愛而珍惜哉又按公式令載印制度云諸國印方二寸今此印方一寸有七分與令不合豈古今尺度長短不同而然耶抑寺社印別有制度邪若未有之則無不載之理詳此印字樣朴拙決非千年內之物則出大寶以前之制於今有所不合亦不可知姑書以俟博雅之君子



文政十三年庚寅夏國學教官柴外東自記

長田溪

長田村ニ有り。長谷の轉支にて一村中知辰より酉戌ニ至り二水長く一村の中央と並び西の境より左より流川原村より出委文川と合流し。

長田八幡宮

長田村ニ有り。當村の生土神に例祭正八月の両月十五日を用ひ又十一月十二日より神事あり。

別當觀音寺

同村ニ有り。慈雲山光明院と号す。八幡宮の別當にて真言宗也。

觀音寺

同村ニ有り。慈雲山光明院と号す。八幡宮の別當にて真言宗也。

本尊

正觀音

作不知

脣士

愛染明王

弘法大師作

此尊像

田園の

中より

掘出處ありとぞ

藥師堂

本堂の左向の傍より

藥王佛と安ら

大師堂

辨天祠

享保年間當村名草川原より不動の板木一枚と

掘出し長三尺三寸幅一尺三寸厚一寸餘尊趺二尺許あり前年新別所密門大德此像を

鑑定高祖大師の作と云先年村民會構の事ありて此像を床より祭り

其夜此より遠慮なく尊像の方へ足とひげと臥る然る深更及び目覚を見たゞりそ容の方へ頭とひげと臥居かゝり程々外

及び目覚を見たゞりそ容の方へ頭とひげと臥居かゝり程々外兩三人の形勢と試みに黒い悉く頭とかゆりて同ド衆人奇異の思ひとあ

四ノ四十五

是より大よ字信一俗小枕返しの不動とぞ称へたりとへ画法彫刻等精妙

かく全く兆殿司の画も所あらんとも言へり

黒目が滝故が谷より西の方北向の谷口より小流なり則溪街道の傍あり往昔へ滝の高さ一丈余

妖怪出で往来と惑ひむと今も里人の號也

黒目が滝の黒坊主といふ事とひりとある

寛文年中方三尺許の蛇骨と

掘出一洲府の官所献びとへ

感應寺古蹟

土井村ニ有り。村の巽の方長田村廣田宮村の境より高き丘山から里俗

感應寺山又松帆山ともりて頂上より東の方一段低き所は礎石と存し平地

斤三十間四方許古津路村感應寺の像起永正五年火災の時同寺の像飛去て此山より

苗りて火鎮となり後感應堂へ飛び入り又一說云此山より古津路へ移り

ともりて其旧跡を感應寺を住持する僧へあらね拜詣ある事

恒例ありと聞ゆ當土井村の旧号を助吉村とひり

大歲社八月十日相撲會

同村ニ有り。社僧平等寺例祭

同村山中ニ有り鳥井の傍小庚申塚

飯盛が隈同村ニ有り山のかくも似くると以て名づけられ山の谷の東より北へ突出して長田村の境へ

あり其祈願の時千筋の矢と製してく神事あり

是古傳ひ云れども辨知あり

或説小飯盛の字章ハ射森かくべ其謂は是より丑の方三町餘と去く

山裾小居廓と構うる庄田村古城主船越定氏の世臣歩卒將門田氏某の宅あり定氏ハ射と善し專か遠近小遊獵行うるが或日柵田某も隨從此森よ山獵あり其日柵田の家屋敷と新造して上棟の式を行つて其光景眼下不見へば定氏傍ニ對ひ彼上棟の家屋敷ハ誰家かうや向ふ柵田某供奉せらば僕々家あべと名へり定氏完爾して然らば幸ひ惡魔降伏の為一箭射るべきのト一命有すより工匠傭夫等を退け申べと言も果たず早箭とづひと發つて矢やまとば其矢則ち彼棟木と射貫うるを云されば字章ハ必らば射表あべとあん其鎌へ中世國君小呈上もと云又柵田氏の居住の地ハ當村の中央ニ而て畠号小よび且其苗裔今猶ニ而住之往昔船越定氏が射貫ねられ一棟木後年小至モトニ小より中世新ニ棟木を副ゆく新あくと上古き棟木と下へ累ねくしが折ノ家よ凶事ナリト者のいはく是ひくニ棟木の事逆乎故あるべと斯有一程ニ棟木の上下と取れて崇敬と篤くし矣

四ノ四十六

其後奇怪ハ止まらず此家ハ所謂斬造の柱あむ世俗神符とも称乞て削て家の守とあひもゆり又此隣モる地の畠号と下馬屋舗と屋舗あどつあり門前馬衆の往來と停め遺名かう柵田某の家小今猶弓一張と珍藏と始ニ張りと一張ハ庄田の八幡宮小奉納モ例祭的矢の式并ニ劍槍の免狀一卷ナリ尚委々味地草小出されば畧之

大墳同村東の方山添村の境ニ在り山の上小數多石と積累ゆく傳云船越氏遊獵の時ぞれ矢大門古趾同村中央川そよ地底より木の朽く如き色赤黒きゆ昔より出で焚ける事ありと常の木の如く尤異氣甚つて其性土又あくび木より古書よ奥州燃る常滑同村移居谷出来て上廣き平地へ委丈莊の領主藤原親秀永正年間より居住す其後土を出でて常の木の如く尤異氣甚つて其性土又あくび木より古書よ奥州燃る或不灰木も云阿州のえ木氏書一云

土井村の溪底一里許の程小黒き木あり里入トコナノと云冬月水涸時是と採て貧民薪と少し臭い是と以て細工の根付あくび木より古書よ奥州燃る一奇樹かう豫州の桑長別の船木等子同然也



道祖神祭

同村ニあり正月十六日滿番サク頭屋とつゝを寛め其家より酒と製衣造

里正某ある人を以八方より取くと抱上マシテ上餅を搗てシテ夫より新婦と

ちぐれりの或ハ前年税役をかゝる者と其でシテモソトを例とし尚ま共其日ハ他所より

頭屋の辺りと往來する者られべ是もかくのでくにゆゑ故ニ他村のもの

其日ハやうと往來する者をかゝれて通行せばとく

按ニカムとあはと幾内ノミハ堂又上モツクを詮ひ事の席とくあはとく

古き例りとくべ一尚考え

安

住寺 安住寺村ニシテ捕陀落山宝藏坊と号シ真言宗

本尊 大日如來 銅佛の 薬師堂 本堂の向ふ左傍ニシテ瑠璃光佛と安ヒ

觀音堂 本堂の向ふ門外ニシテ本多千手觀音と安ヒ長二尺余

觀音堂 利生山と号シ廢東光寺の本多千手

當尊觀世音ハ往昔此村東光寺 往昔安住寺を本坊として其余五箇所ニ東善坊農家の小安置モリ所の古像あり然ニふ同寺廢亡の後もに轉び時より貞享の頃當像と偷去りのにて其往去とあは餘不圖北方村西光寺小買求ら尊信一々小寺僧病と發一或ハ怪異の夢と蒙了カドニ是正一々灵像の所為あらんと野峰の大院を送アテ讓わリさる程又其寺の住僧の夢小告て曰我ハ淡州委文莊助吉村 土井村の東光寺の本尊也旧地小飯座セ

べとゆき是小より急ぎ此事と知らせ来りケレバ村民等續ひ野山小登て守護一飯アシ別小堂宇と建造し安置と云を是驗あらば一て信仰の老若衆詣問歎か一則當州巡礼の札所か一第十六番あり千本塔婆綱異祭當村の中央路傍ある姐の上ある地の畝号と千本と云又其下ある平地とうづきと云此地より於て毎年千本塔婆綱祭と称して執行異例なり其式ニ云此村中より冠民たるりの十二三戸より輪番頭屋とつゝと定め正月十一日此家小壯容のもの集り稻藁とく長さ七尋半太さ二尺ばかりの大綱又長三尺ばかりの綱十三巻と束は大綱又七所注連の尾を垂らすてく括で檜の小枝一本充あれよ狹く長さ二尺の塔婆千本を刻ミ寺僧を頼て頭屋小請待と僧侶塔婆小兜文を書或ハ鎮符の文を書く板ふちり讀經一々寺小飯了其文ニ云

御祈禱之卷數

奉讀般若經一百卷

奉念諸尊神咒各七遍

奉造平塔婆一千本

奉建石之塔十三組

奉懸房華十三箇

右所祈者為金輪聖皇天長地久一天恭平四海

靜謐風順時五穀成就

阿淡太守武運長久村中息災延命牛馬等除災

如意滿足矣

淡州三原郡助吉村中謹言

年号月日

頭屋とうやおり一統ひとう酒宴しゅえんと催さい一各興おきふ衆しゆとてハ大綱おおつなの細繩ほそなわともづともづ一 大綱おおつなと持もつまう往來むかわらいの者ものと卷付まきつけ或もハ若徒わか徒と違犯たがいはんの事こと論るとハ其家そのいえ又また種たねの悪あく戯ぎとあり故ゆゑよ其日そのひハ他鄉ほかきょうの者ものもこれと恐おそれて此所このところと避さけて賤道じんでんと往来りわせとるをあり斜陽しゃよう不至ふしり十三垂じゅうさんたれの細繩ほそなわと元もとの如ごとく結付むすびつけ蛇への形がたと作りて里正さとまさの門もんとあり

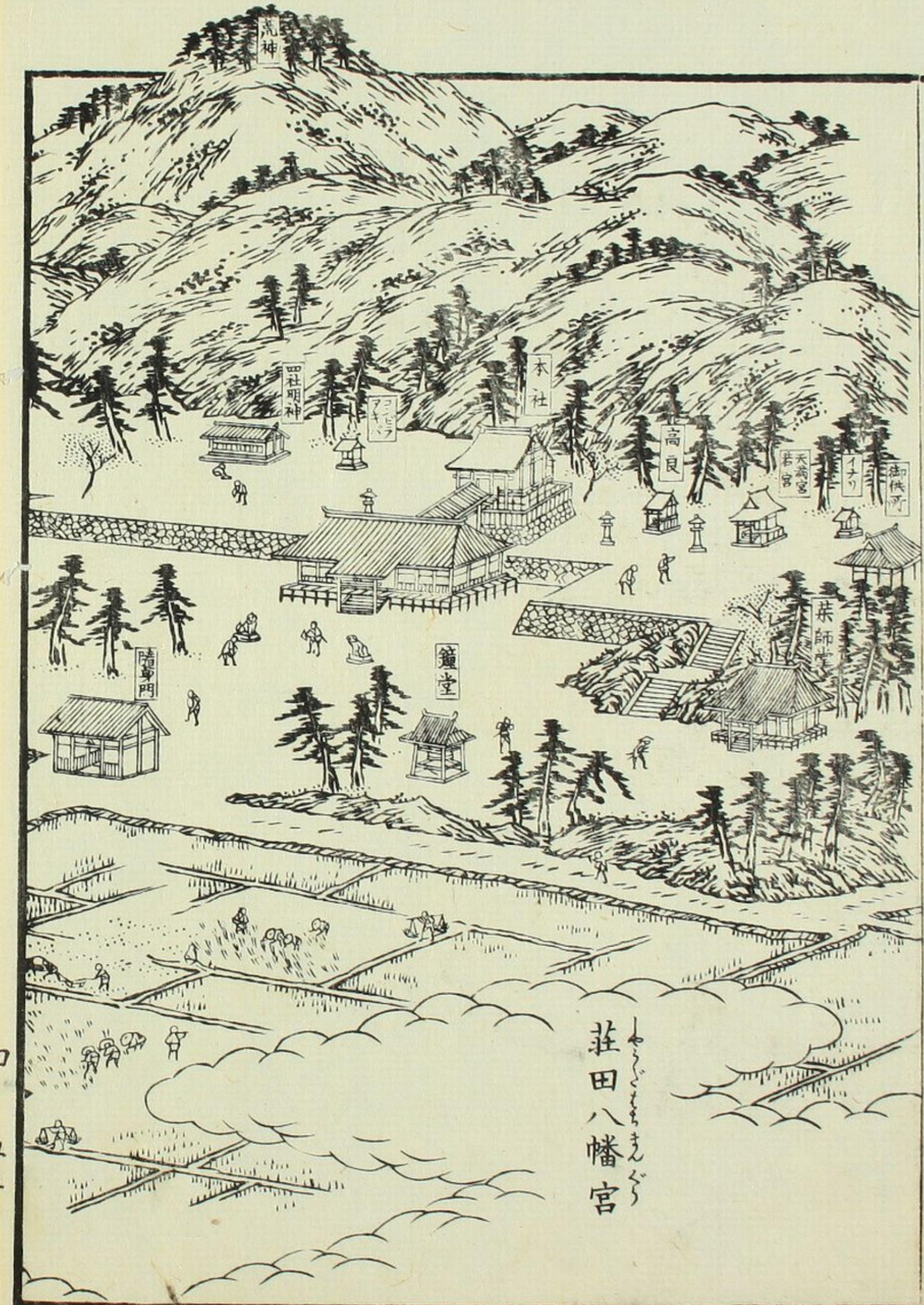
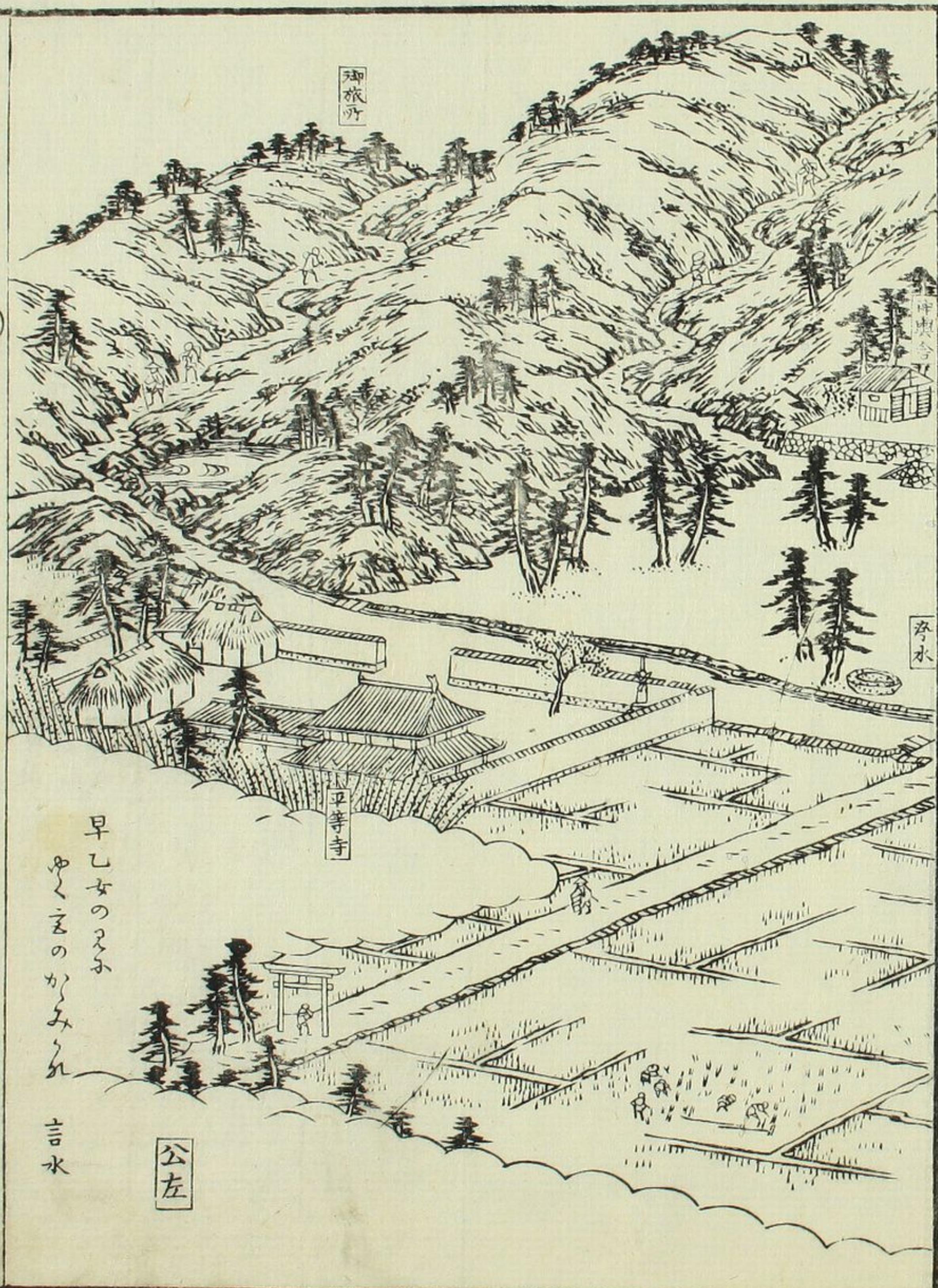
四ノ四十九

前まへより掠子樹くろしき小纏こまつに置おきへゆき此かましめ保ほし一年の間まんをを扳又千本の平塔婆ひらとうぼハは七束しちそく小括こくわくと十三歳の童子わらわ小荷こひをせ千本の地藏尊じぞうそんの前まへと運はび来き立たあくべ村民むんざい等など来きつゝ回まわ童子わらわハは坂さからに川かわ邊へ小石こいしと重うき塔とうと組上川じょうかわの南向みなみむかしより互ひふ水みずと刎き掛爭論きがくそうろんを鎮符ちんふ小村号こむらごうの助吉村すけよしむらと用もちハ古いわゆるの遺風いふうやや此か異例いりれいハ古代こだいよりの事ことと思おもふれう然ぜんとども其傳說しんでつせつ詳くわああばば此か村むら六坊ろっぽうの寺院いんてんひひ一時いちじ行おこなむ所ところ謂いわゆる委文まいぶんの莊むらの大會だいわいて此か法會ほうくわいの料りょうと云いふ田畠たんば一丈二畝じょうにじょうを安住あんじゆふ寄附きよふ其畠そのばと經免きょうめんと云いふ

城腰じょうご耶趾やし同村の南土井と庄田の村境むらぢゆうにて臥竜山の北きたと高峯たかねと頂上てうじょう一反いちらん北きた一段いつとうの居住じよき所ところ領委文庄りょうまいぶんじょう五千五百石船越定氏ふなこしじこれと減へく知し行おこなと押領おさめりと云いふ寛政かんせいの初年此絕頂ぜつとうと小堂こどうと立て地藏じぞうと安あんり

莊田八幡宮じょうでんはちまんぐう庄田村じょうでんむら南方なんぽうの山さんの方ほうへ委文まいぶんの莊むらと村むらの生う育いくして則そ神道しんとう村むら安住あんじゆ村むら庄田じょうでん村むら高村たかむら李文村りぶんむら奥畠村おくはたむら庄田村じょうでんむら例年正月十五日じょうがつじゅうごじ月十五日つきじゅうごじ十一月廿日じゅうがつじゅうにじ別當平等寺べつとうへいじょうじ神官じんかん称宜めいぎ本村中むらなか御供殿ごくうでん本宮ほんぐうの西にし薬師堂やくしどう拜殿はいだん西にし殿でん不動明王ふどうみょうおう多門天王たもんてんのう左右うしゆ末社まつしゃ高良社こうらしゃ若宮わかみや天満宮てんまんぐう金毘羅こんびら秋葉緋荷あきはひは本社ほんしゃ本社ほんしゃの左ひだり右ひだり神龕藏しんとんざう本社ほんしゃの右ひだり石鳥居せきとりい正面まっめいの馬場ばば元祿十一年十二月所建げんろくじゅういちねんじゅうにがつ拜殿はいだん四間よんげん小七間こしちけん瓦葺かわらふき至いた古いわゆる造形ぞうけい傳云飛驒工匠ひだこうじょうの建たて取造とりつくり也よ花譚はなばの工匠こうじょうとづらひ一人ひとり手斧てののこ手斧てののこ見みる者もの有あり

希遺和哥集きい古いわゆるひのたみの手斧てののことづらひ見みる見みる



異稱日本傳曰飛驥國多匠民巧造宮殿守院迄今稱飛驥工云
當村の里正加地氏表徳と弓羅と云天明の頃輯む所の誄書題して志都
織と云其序文曰上座の句を當社奉納せり

因記季文八幡宮等事

倭文庄倭の首字也古より倭文布と織出せ故名產ふとく名と得也
トリハシツノリの畠訓郷の庄田山ニ千木高ち一郷七村の人齊ひ祠も八幡太神の宮
居からくとく飛驥の内匝が墨縄せるとかん傳る拜殿あと巍然とく
老樹の緑積がどく奇妙の神境かうけし本社へ西向みて乾の方五丁許の地小
船越の旧邸北の丸山下鎮守天満宮の祠あり其東の岡又相悟寺觀宗寺の
禪蹟遺る上ハ卧龍山也川端よ加地石見が故邸北天文年中船越の類族
加地左京之進六郎兵衛等當社と修覆し輪輿更に新也境内小心王院
平等寺ありて祭禱の事と掌る丈明の頃船越左衛門尉定氏驍勇の誉り
て同國慶野の原潛洲が潤の大蛇と唯一箭ニ射留くと簾と叩ひて吸る

おぬち駿馬の跡と追々委文の邸小未りくと定氏の箭ゆく是と
斃一庶民の害と除き又其鳥の舌雁股の二鎌も神庫小寶藏大坂
故城の遺士入交氏京師小携へ去る蛇骨ハ世小遺り此家小有と寛文
七年又寶曆二年國君へ奉る彼船越ハ東國の英士あると鎌倉の代
是と撰く委文の采地小居らしんと也後船越五良右衛門尉景直不與て
豊太閤小歸順復神祖小奉仕とより今も幕下小爵禄し末世どり
榮へ給へ予ハ即卧竜山の麓小世々其故邸と守りて牆塹の内小家居
もととば集も遠祖の敬神小効ひく廣前小納め奉るりのなほん云
若宮社例祭正八の兩月廿日と用也

平等寺同村舊が谷の口明慶山心王院と号は八幡の別當と真言宗本多大日如来長一尺四寸許座像
什物大般若經の脚本立と奥書小康和二年と記して今嘉永三年迄七百五十年ニ及ぶ
船越氏邸蹟村の西に壇築牆の趾今存

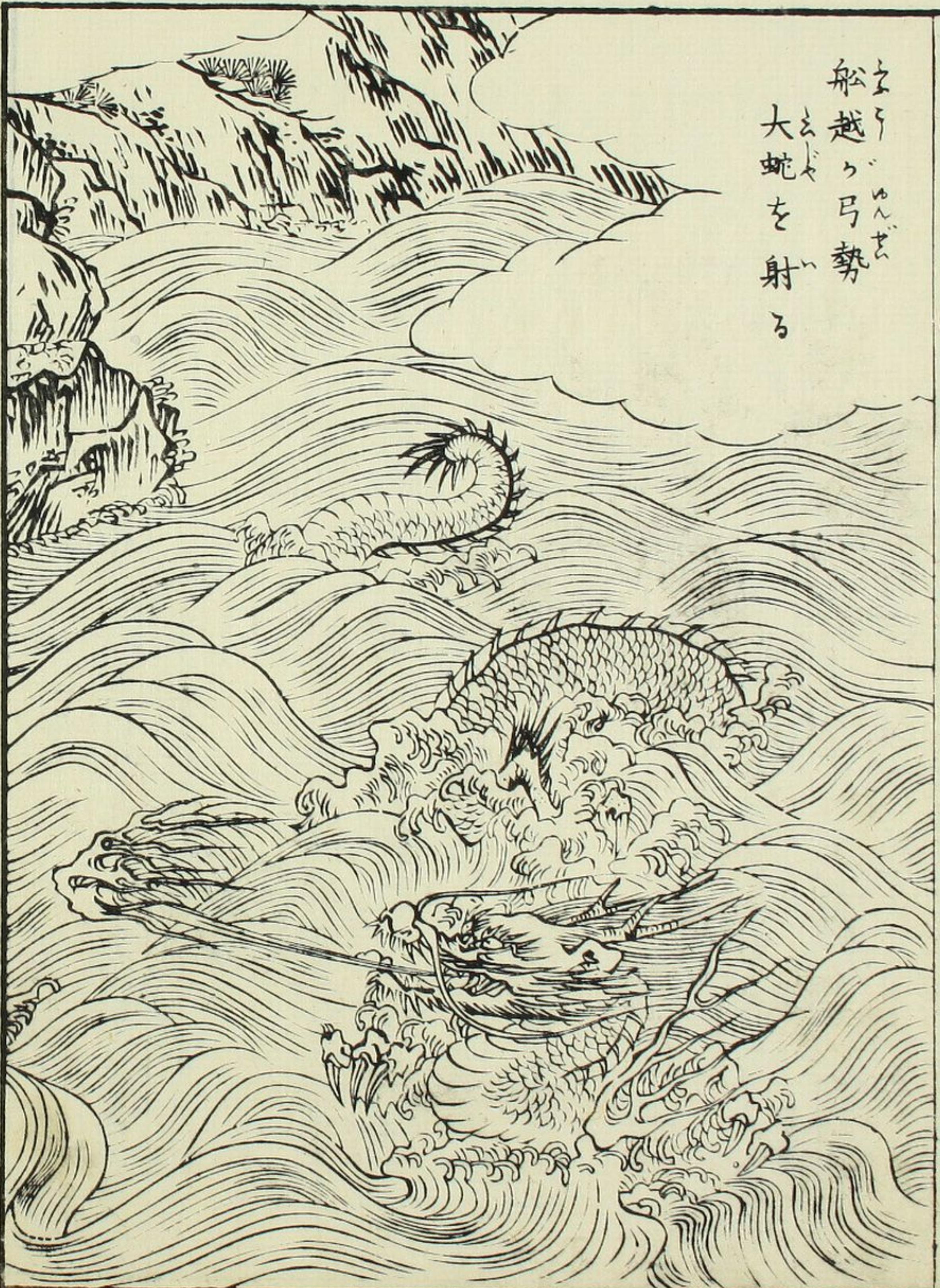
船越氏ハ大職冠鎌足公の後胤清綱六世の孫船越右衛門尉維定正治三年
正月梶原一族歿之の時維定其族涉川兼定吉香次郎等と追戦駿州

独ヶ崎きのこに於おくこれと誅ちうし頼家よりいえ其功ごうを賞たまひし采地さんちと所ところを賜たまはしふ維定淡路國みねじひあわせ慶野庄けいやうじょう委文いぶみと賜たまはしふ世よを委文いぶみの居城きゆじょうを依よて委文いぶみの船越ふなこしと稱めいし余後十代左衛門佐定氏さだる文明三年古津路こづるの毒蛇どくじゃと退治たいぢし其身そのみも又毒氣どくきふ中なかて死死定可ひき早世さかせい定俊さだとし妙めうと得とく然ぜん然ぜん定可ひき早世さかせい不ふよ還俗かんぞく家いえとつゞ出家しゆげの名な實阿じつあと号くわす或云一花堂いっかどう画ゑくとくらの佛像ぶつじやう一軸福井村大日堂だいにちどうと云又北方村高和寺ニ金胎兩部こんたいりょうぶの曼陀羅まんだら羅

孫治郎景倫くみわ一子五郎右衛門尉景直くみのぶ天正九年十一月秀吉炬口の城くわのくち不入ふりゆ景直くみのぶと召めしれ御蓋鞍ごあわら置馬おきばと賜たまはしふ且曾祖父定氏さだる勇氣ゆうきと称美めいすと云或云船越氏ふなこし駿河國人すのまくにじん委文莊いぶみじょうと領りようして上方かみがたより下向おもむく慶野の浦けいやうのうら不着船ふちくふねと其浦人そのうらじんと郷導ごしゅとして委文の館いぶみのやかたより先領主せんりょうしゆと討果とうがして自ら領地りょうちせせど

常磐草按ときわぐさ云文明中細川成春守護の時藤原親秀とうとう領主りょうしゆと感應堂かうぎょうどうの鐘銘かねめい不見みゆき又永正年中の記きは委文莊いぶみじょう感應堂かうぎょうどうとられバ親秀ちかひでハ委文莊いぶみじょうの領主りょうしゆあらば然ぜんと親秀ちかひでの子孫ししゆ此莊このじょう在あて船越氏ふなこしの易やす小滅めぐれふくらむ船越氏ふなこしハ天文の頃ときと言いひ傳つたへふ說せられ巴三好家みよし小属しゆと委文の莊いぶみのじょうと掠奪くわうだつセせ也や細川氏ほそかわと費ひ天文てんもんア波屋形養あはやがた宜

の屋形やけとし其後義輝將軍よしひ一說いつせつニ船越定氏ふなこしハ細川讚岐守成之さぬき三属さんしゆと云成之なまら了り此時代じだいの事ことあるん乎う一說いつせつニ船越定氏ふなこしハ細川持常もちつねの姪めいあると持常養子もちつねのよしとし宝德ほうとくの頃ときの人ひとへ時代何なんの說是いつあるや知しト云細川持常もちつねの傳つたえ古書こしょ及び碎玉詫さいぎ金集談きんじゅうだん諸家深秘錄しゆひろく故事因緣集いんげんしゆホニ船越氏ふなこし潛洲せんしゆ里老りろうの傳つたえ古書こしょ及び碎玉詫さいぎ金集談きんじゅうだん諸家深秘錄しゆひろく故事因緣集いんげんしゆホニ船越氏ふなこし潛洲せんしゆ池いけ大蛇おおへびと射さふと何なんとも大同だうどう小異こい不審ふしんの所ところハ就中さゆうしゆう委文莊いぶみじょうの内うち某傳もし古書こしょ云文明三年の頃定氏さだる大蛇おおへびと誅伐ちうはセせと凡世ぼんせい小傳こしゆとし抑定氏さだる領分りょうぶん委文いぶみ領の内うち慶野けいやうの邊潛洲せんしゆが淵ふち不ふ大蛇おおへびすす人民牛馬じんじゆと害いたずら耕作こうさくとてふ絶ふく然ぜんとんとん依よて領内うちの農民のうみん訴こぼ退治たいぢの事ことと乞こふ定氏さだるとすす馬ま不ふ名めいと得とく一人ひとりありある退治たいぢの心こころ直ただちに發起はつきしまま八幡はちまんの社前しゃまへ一七日祈願きがんとこめ稍すこ芦毛あしらの馬まは打うの重藤じゆとうの弓ゆみ矢やととそくそく携けいつ下僕しやくと從つ潜洲せんしゆの池いけ不趣ふしき堤ていと回まわて再回水面すいめんとちと白眼しらまなこ我領わらう地ちの人民じんじゆと害いたずら牛馬うまいと損そんふりの正まさ此こ池いけの妖怪ようけとあわり速はや現出げんしゆつと声こゑ呼よ此時長なが三尺さんしの小蛇おおへび水上すいじょう小浮こは遊び游まわ回まわ定氏さだるきつと目めとくとくめ又また高声たかこゑ呼よ云い人民牛馬じんじゆと害いたずらよ何なん其形そのかたちと以よ



せんや正駄と頭かぶとせよと言も終らおひまづ忽ち水上白浪起り四方曇り
暴風諸木と吹倒ふきとうんとし時ときは小蛇こへびハいづ一隱隠まくろ一池水激げきり逆さかまくろ
その長凡ながまんせ尋餘さめゆの大蛇おおへびとあつて顯あらわれ出紅レッドの舌とひしめうヒシメウ怒イライラる眼まなこ
鏡かがみと双ふたし如おほくあり定氏手早はやく矢と取とて放はなす持滿じまんを放はなつ箭の弓ゆみやまくらば
大蛇おおへびが口くち小射こじ込こ時ときふ震動しんどう風雨ふうもくもくと溜たま得とれば
鞭むちで上あがく一散さん小駆こくりく下さ僕僕ハ馬まの尾お筒づつ小取とつと引ひきく俱とも逃とげ
高村の山下さんげ下さ僕僕ハもとで小息絶きり大蛇おおへびハいづどく乗馬のりまうのと溜たま得とれば
追おけ来き櫟田村の大楠おおくすふ纏まつひ上あがり定氏じょうしハ行ゆと窺くわひ尚あも跡あととを
慕まつひ来き定氏じょうしハ漸館せんかんようく去よ閑かん小有ごうと容子ゆうしと見みるに既すでに大蛇おおへび
門際もんぎ來きり終おひ屋上やのう小登のぼんと定氏じょうし二の矢と放はなつやと大蛇おおへびの咽喉のど
深ふかく中なかもバ毒氣どくいと吹ふけ狂がいめぐらめぐら死死て死り定氏じょうし此この毒氣どくいニヤ中なか
えん心地じんじ胸きみへ苦くるつ二日ふつかり亡死せりとぬ家嫡いえしやくあり人ひと毒蛇どくへびの體からだ
館かんの南みなみの谷たに埋う今いまの長田村の内うち数川すかわとりふ地ぢあり後年ごねん此谷このたによう大おほある

蛇骨へいこと堀出ほりぞ國君くに小獻こげん正保年間じょうほねん則此骨へいこハ洲す本ほんの會館くわいかんと藏くらとくぞ又下僕しもが馬まの尾お小取付こく逃と出だし所ところと小者こわざの瞬このととふ古津路村こづじゆそん歎号！則ち池いけより半町はんまちわくく東ひがなり又蛇淵へびふちといふハ潛淵くわいふちと別べつ訴そ呼よぶ則ち池いけより半町はんまちわくく東ひがなり又蛇淵へびふちといふハ潛淵くわいふちと別べつ訴そふくろ大蛇おおへびの尾おと地上じちじと叩たたき苦くるとと所ところとといふ一說いつせきと大蛇おおへび纏まつひ登のりく楠木くすのきハ高村たかむら小切こぎりしが此木この木も蛇毒へびどく小滅こめつ枯かぬ今いま其その楠木くすのきと取とく松本村まつもとむらの潮青水しおせいすいの因いんと大蛇おおへびと射と事ことと載のれども何なんも大同だうどう小異こいりく是非ぜひとあらば又船越定氏ふなこしじょうし大蛇おおへびと射とくこうの鎌かまの圖ずも諸書しょしょ小出こだし同どうじばむ當時じだい八幡はちまんの神庫じんこ有あざれば何なんと真圖まずとせんや分わけぢぢ

納氏第址

戎の社の南川の上手に近い此辺を納の氏姓を号する家三所の各農夫あり船越侯在領の
又安住寺村より納氏の末裔あり當時農士あるが未詳あるが
又江府津田家より納氏の末孫は白船越家の老臣ありと云

太平記綱目

良忠大塔宮小高氏の反心あり事と告ぐ曰同意の者多かくひ

阿波より小笠原一黨淡州

少々島田

藤田納古川

等云云是と以て按めり原來

納氏も名のる士ありべし其後世

なりて有りん未詳あり

加地氏故邸

則ち當村里正加地氏某の宅地あり東西四十八間南北五十九間午未向東より南へ

堀の跡あり巾一間より一間五六尺まで今時一段低く田畠とある

天文年中加地石見同左京之進同六郎兵衛など名見へり船越以前より居住定氏居を當所小構ふより加地氏も是より屬して家老とありとぞ諸説多く有り繋

祇園社

八幡の社の西の丘

牛頭天皇と名す

荒神森

八幡のうち山の肩より

荒神の小祠あり

松月の清水

荒神の東

田園の用水

清泉

とつづいて

ざれども池の邊

淡路國名所圖會四之卷終

